

第二章 書之部

# 一、伊勢度会関連書家之部

編者の素人分類では、伊勢宇治山田には次の各流派があつたと思われる

壹、(蔭田)田器派：貫名海屋↓松田雪柯↓橋村橘陰・久志本梅莊(度会常幸)

## ●松田雪柯田まだせつか(一志)

- 一、詠竹五絶 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 二、五絶草書 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 三、元旦年仕御饌七絶 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 四、七言絶句 (2020年4月伊勢市に寄贈)

## ●橋村橘陰はしむらきつじん(一志久保)

- 五、蘭亭之記 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 六、般若心経 (2020年4月伊勢市に寄贈)

## ●久志本梅莊くしもとばいそう・度会常幸わたらいつねゆき(山田)

- 七、大人和歌 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 八、草書五古 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 九、蘭亭記 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 十、秋之詩 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 十一、行草書五律 (2020年4月伊勢市に寄贈)
- 十二、二行詩 (2020年4月伊勢市に寄贈)

十三、五言詩 (2020年4月伊勢市に寄贈)

十四、七律 (2020年4月伊勢市に寄贈)

十五、一行詩 (2020年4月伊勢市に寄贈)

式、篆刻・鉄筆派：小俣蠖庵↓福井端隱↓松木偉彦

●小俣蠖庵 おばたかくあん (八日市場?常盤町)

十六、七律詩 (2020年4月伊勢市に寄贈)

●福井端隱 ふくいたんいん (浦口)

十七、高芙蓉先生印影 (2020年4月伊勢市に寄贈)

●松木偉彦 まつきくすひこ (田中中世古)

十八、顛書 (2020年4月伊勢市に寄贈)

参、御家流派：1802年伊勢で寺子屋を始めた山本源吾を祖とする所蔵なし

四、諸派：橋村痴亭↓山口穎庵、土井贅牙↓矢土錦山

●山口穎庵 やまぐちてんあん (一志)

十九、書 (2020年4月伊勢市に寄贈)

廿、詩 (2020年4月伊勢市に寄贈)

●土井贅牙 どいごうが (津)

廿一、一行詩 (2020年4月伊勢市に寄贈)

●矢土錦山やつちきんざん（田丸）

廿二、七州経過之絶句（2020年4月伊勢市に寄贈）

廿三、七律詩（2020年4月伊勢市に寄贈）

## 五、神苑会関係

●広瀬淡窓ひろせたんそう（大分 太田小三郎の師）

廿四、春好五言絶句（2020年4月伊勢市に寄贈）

廿五、二行詩（2020年4月伊勢市に寄贈）

●土方泰山ひじかたたいざん（土佐 神苑会評議員）

廿六、詩書（2020年4月伊勢市に寄贈）

廿七、扁額 萬福来

## 二、伊勢度会外書家之部

○亀井南冥かめいなんめい（福岡）

廿八、書

○日下部鳴鶴くさかべめいかく（滋賀）

廿九、七絶

○（紫野？）栗山しほのりざん（讃岐）

卅、一行詩

○(杉) 聴雨すぎ ちようう (山口)

卅一、琵琶湖七絶

○(永坂) 石埭ながさか せつたい (名古屋)

卅二、七律詩

○中村敬宇なかむら けいう (江戸)

卅三、書

○貫名菘翁ぬきな かいおく (阿波)

卅四、書古人語

○貫名海堂ぬきな かいどう (播磨)

卅五、二行詩

○梁川星巖やながわ せいがん (美濃)

卅六、絹本七絶

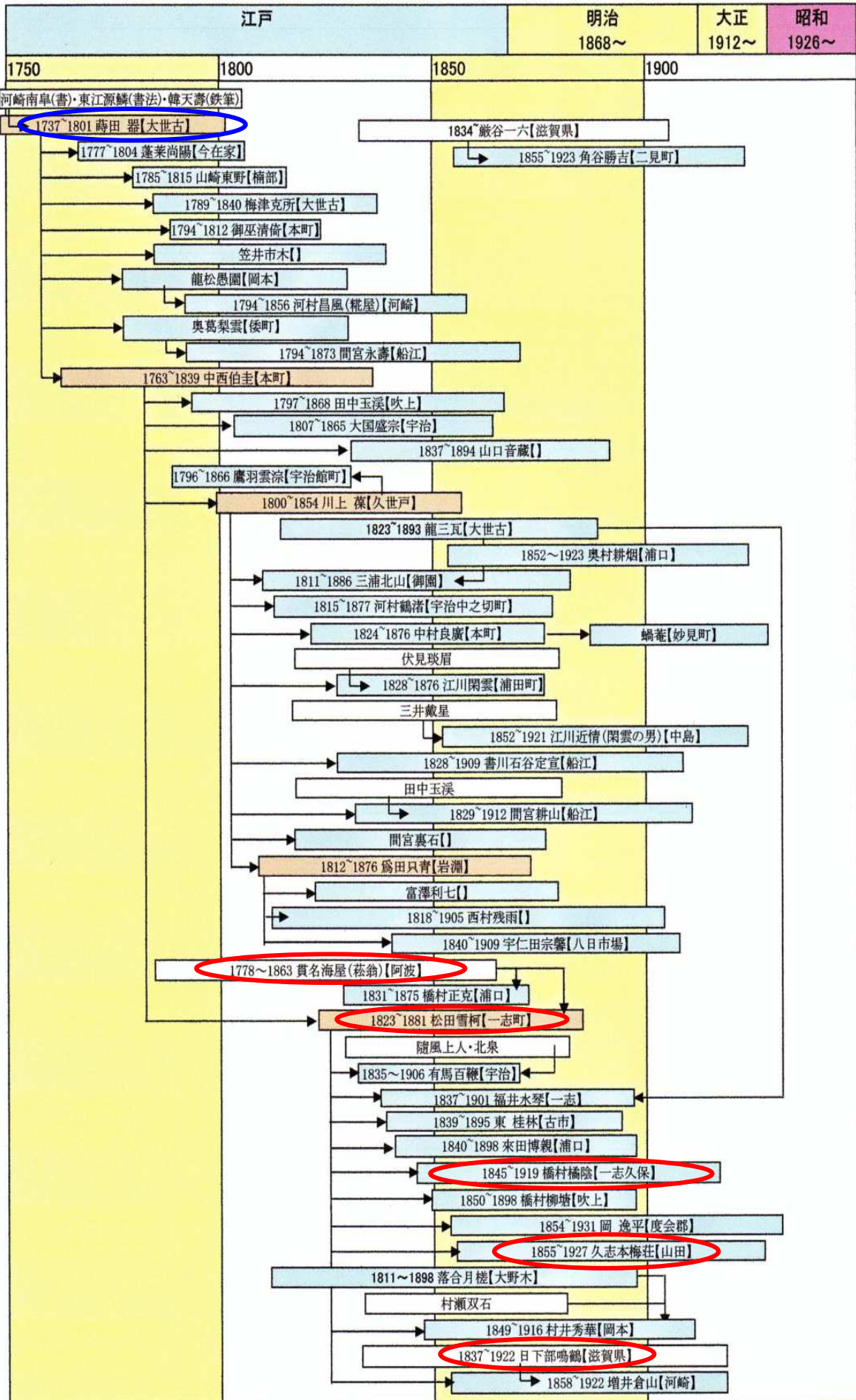
### 三、作者不詳

○武彦たけひこ

卅七、和歌

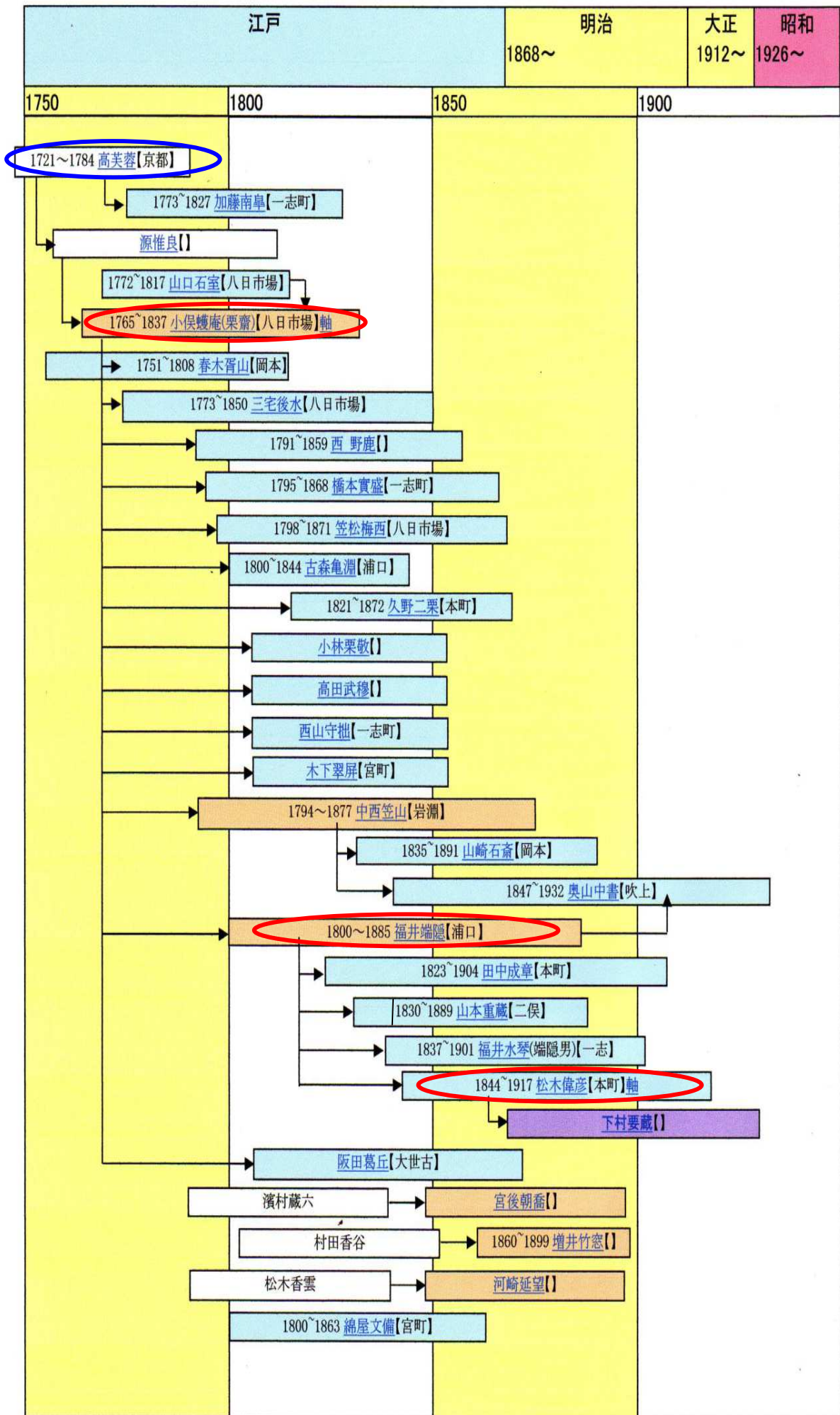
○憲巖のりいわ?

卅八、松

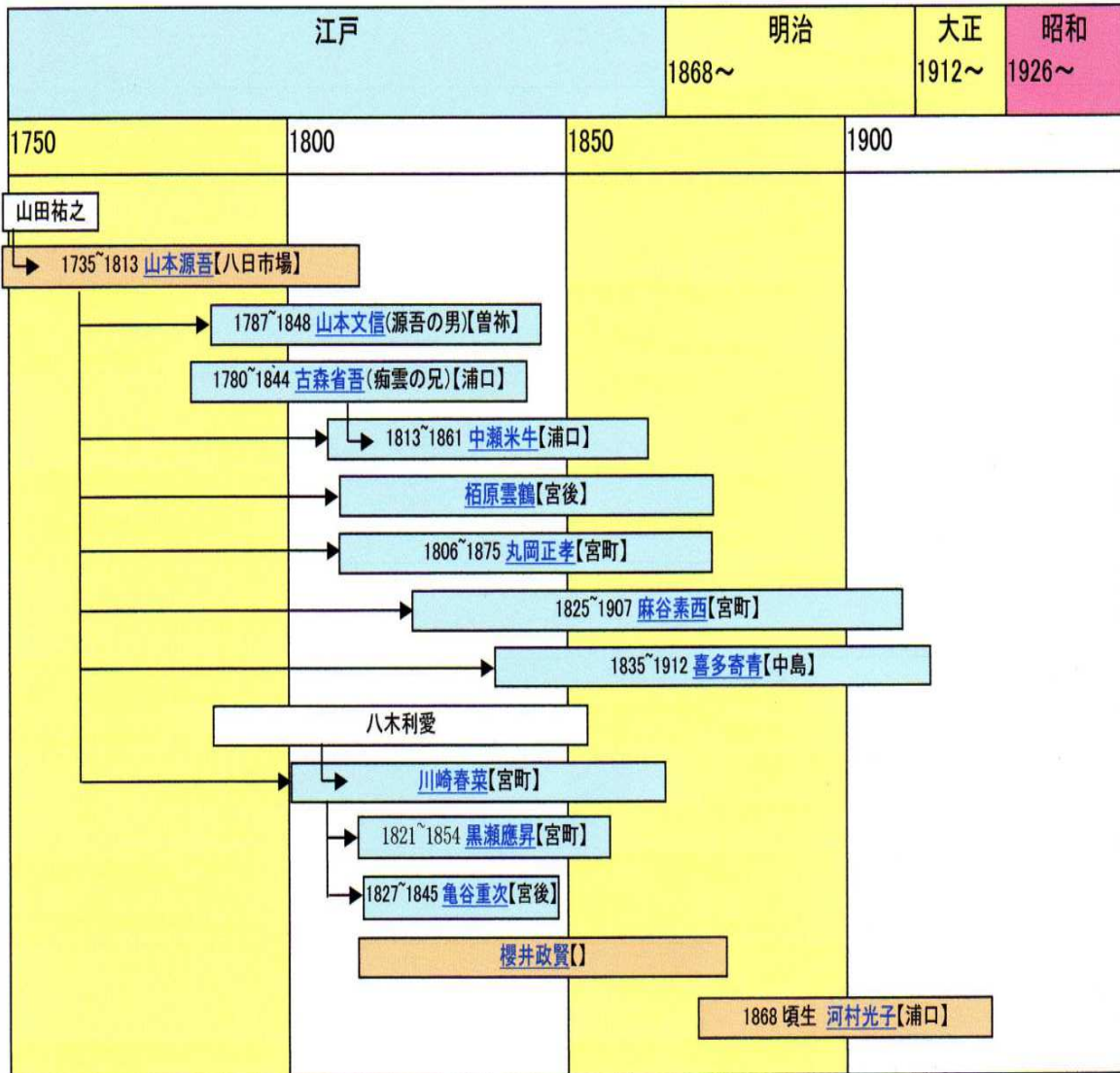


一、(蔦田) 田器派：・貫名海屋↓松田雪柯↓橋村橘陰・久志本梅莊(度会常幸)

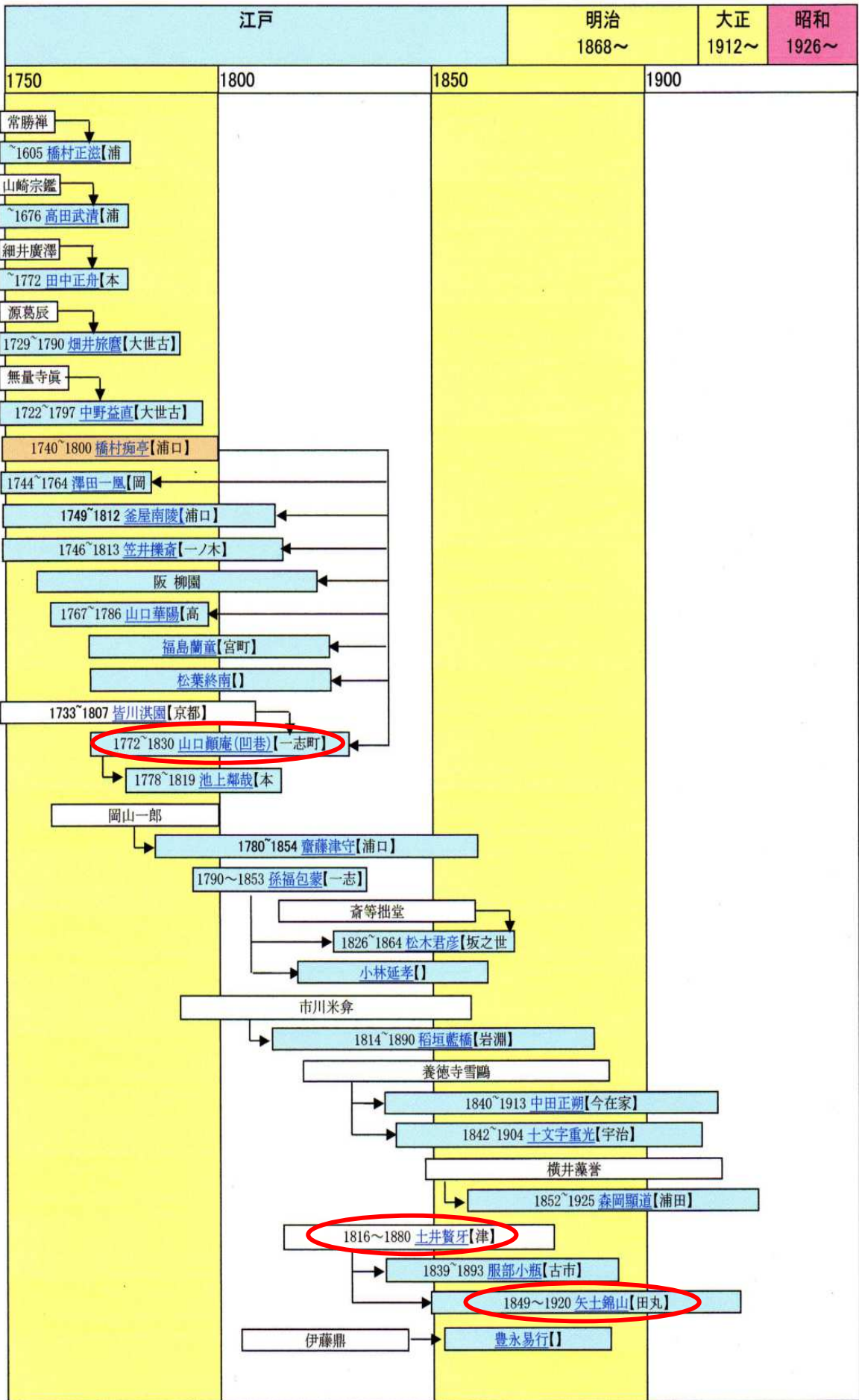
二、篆刻・鉄筆派：小俣蠖庵→福井端隱→松木偉彦



三、御家流派







四、諸派：橋村痴亭↓山口願庵、土井贅牙↓矢土錦山

# ●松田雪柯

まつだ せつか 田器派 一志町

【別称】元修、縫殿、左近、公静、聊得軒

【享年没年】59歳1823 文政6(1819) 文政2とも(1881 明治14)

【生地】下ノ久保(一志町)【住地】同

【系譜】適翁の男

【略歴】鑑取内人に補し、明治維新後更に皇太神宮主典に任じ大講義を兼ねた。初め父適翁に漢学を習ひ、後猪飼敬所の門に入り、又谷三山にも従った。

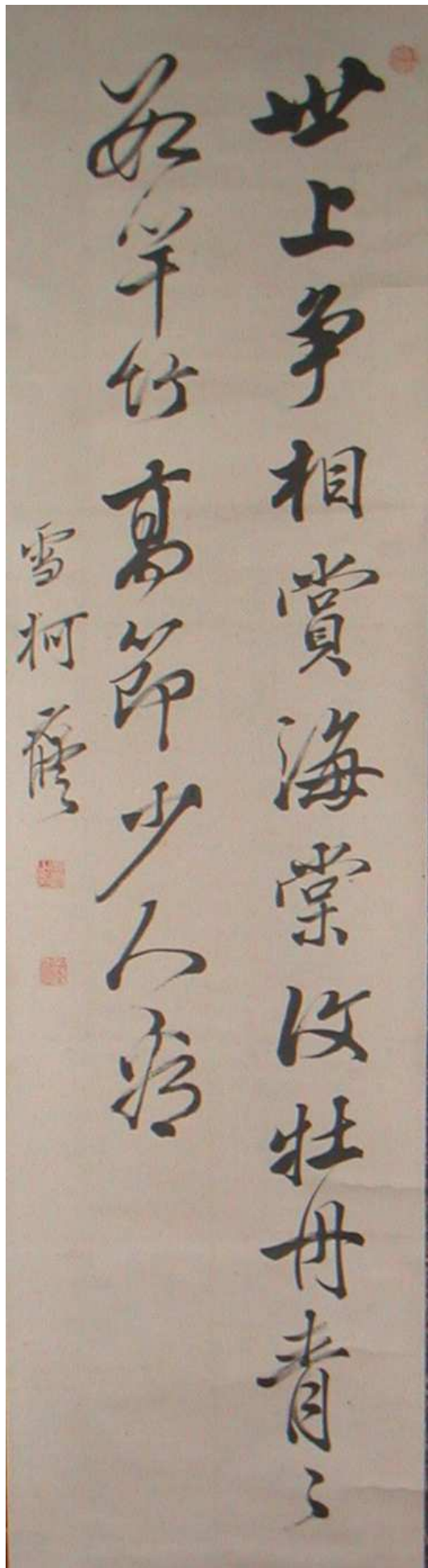
【書画暦】書は少にして中西伯圭に学び、其没後は上京して貫名(菘翁)海屋に従ひ、其書諭を聴いて大に悟る所があった。山田奉行秋山安房守の爲めに学を講じ、又家塾を開いて漢学並びに書法を教へた。明治11年官を辞して東京に出て巖谷一六の家にあること数年、日下部鳴鶴等と相往来して書名益高く、清國楊守敬の激賞を得たと云はわる。後年三條實美に知られ、其揮毫の額を与へられた。

一志町にある松田雪柯翁旧跡碑 ↓



# 一、詠竹五絶

(2020年4月伊勢市に寄贈)



世上争相賞海棠復牡丹青々  
数竿竹高節少人看

雪柯元修

雪柯元修

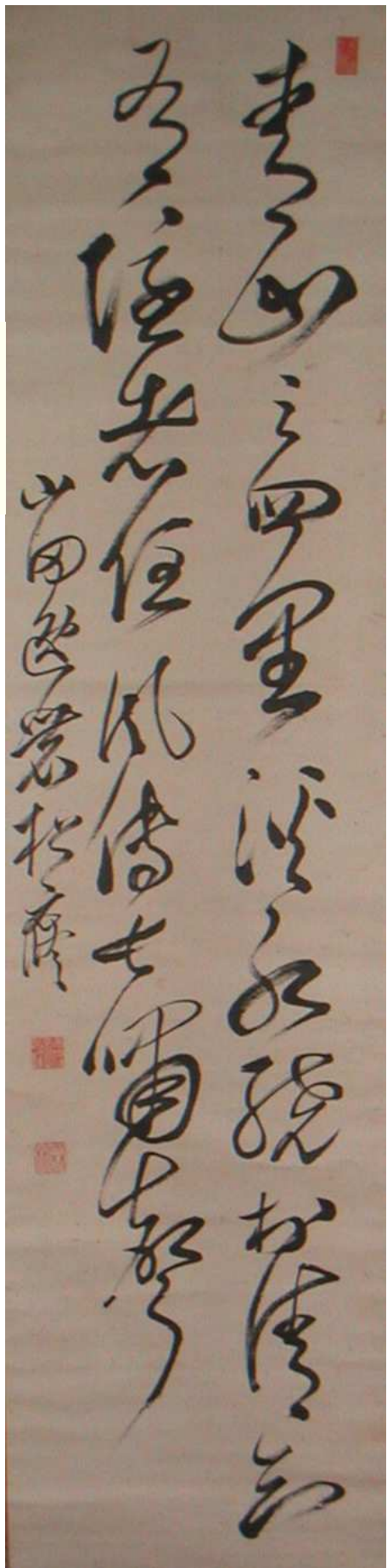


松田雪柯先生詠竹五絶

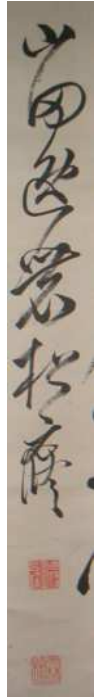
清栄堂之賞玩 八二叟 眉峰堂書

# 二、五絶草書

(2020年4月伊勢市に寄贈)



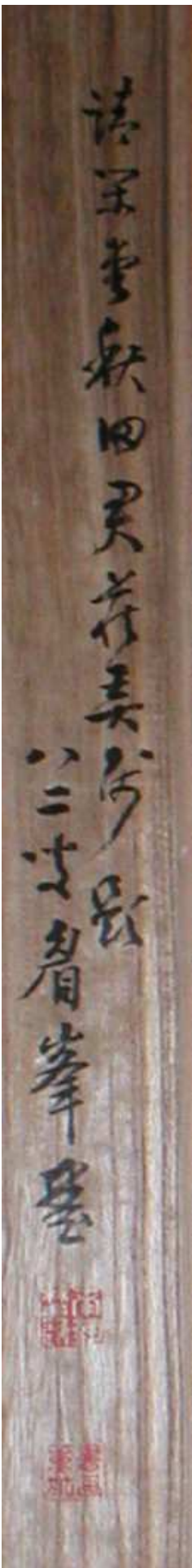
青山三四里溪水繞(繞める)村清知  
有隱者住風傳長嘯聲



山田逸農松元修

雪柯先生五絶草書

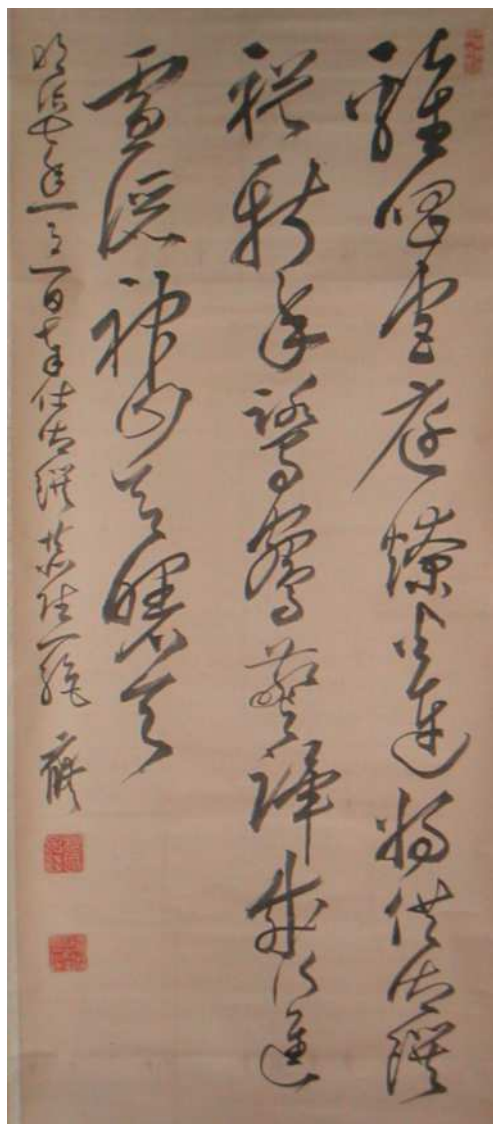
雪柯先生五絶草書



清栄堂秋田君莊美属(II 嘱)題 八二叟眉峰堂

# 三、元旦年仕御饌七絶

(2020年4月伊勢市に寄贈)



雞唱雪庭燎火連將供御饌

祝新年鷺鷥エニ警蹕さきばらい成行進

雪灑そそく神山其曙天

明治七年一月一日奉仕御饌恭佳一絶



元修



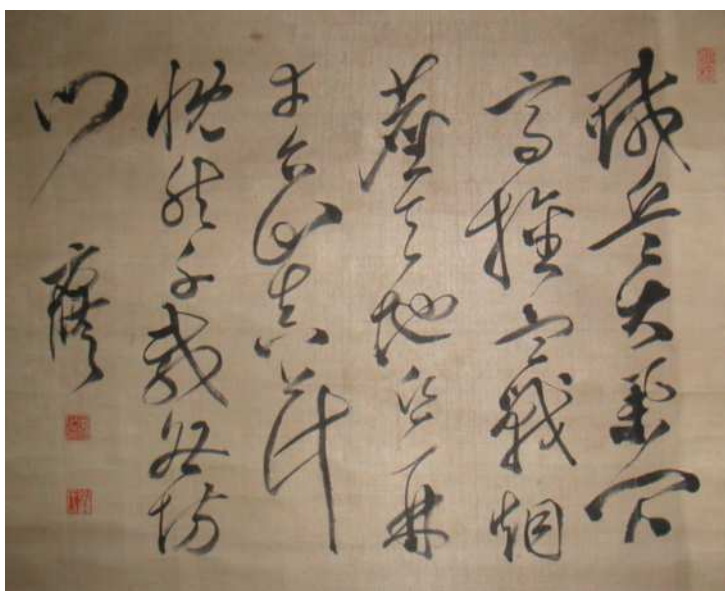
雪柯先生元旦奉仕御饌七絶

雪柯先生元旦奉仕御饌七絶

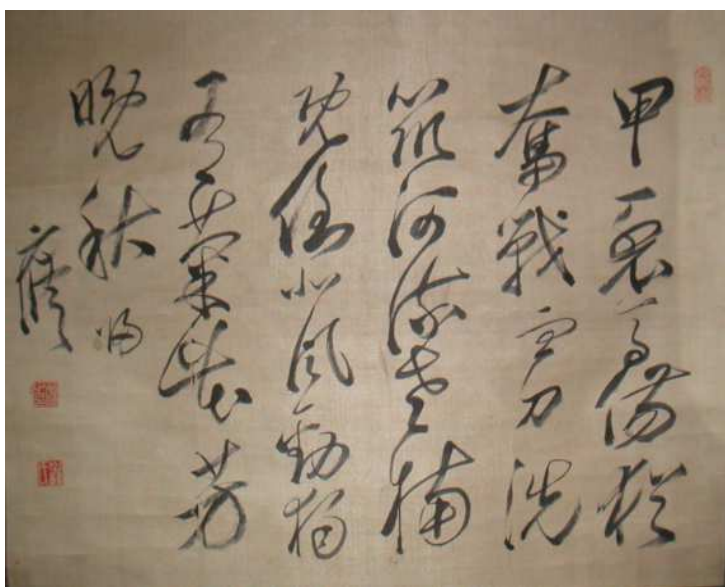
清閑堂主人雅囑 八二叟眉峯 清閑堂玩賞

# 四、七言絕句

(2020年4月伊勢市に寄贈)



○兵大舉間  
高推宣戰烟けむる  
塵天地低一林  
幸台山真茂  
慨然千載○場  
門 元修



甲裂馬場猶  
奮戰宣刀洗  
筑河流左楠  
既倒北風勁獨  
有菊花芳  
晚秋歸  
元修



松田雪柯翁楠氣池二公之七言絕句叟幅

長山文訪 珍藏

# ● 橋村橋陰

はしむら きついでん 田器派 一志久保町

【別称】正環、景玉、石瓢子、

【享年没年】74歳1845 弘化2〜1919 大正2

【生地】一志郡松崎村

【住地】一志久保

【系譜】中山正廣の次男、正衛の養嗣

【略歴】資性剛直不羈(き)、夙に松田雪柯の門に入つて漢籍を学び、外宮祠官として家職を襲いで居たが、明治17年職を辞して東京に出て諸名士に交わり、また行餘学舎を興して子弟を教授した。後再び郷里に帰りて神宮権禰宜に任じ、後六位に叙せられ、神宮皇學館教授を兼ねた。

蘭亭序 Wikipedia

353 永和九年、王羲之は名士や一族を会稽山の麓の名勝・蘭亭(現在は浙江省紹興市)に招き、総勢42名で曲水の宴を開いた。その時に作られた詩27編(蘭亭集)の序文として王が書いたもの(草稿)が「蘭亭序」である。王は書いたときに酔っており、後に何度も清書しようと試みたが、草稿以上の出来栄えにならなかったと言いつた。伝えられている。いわゆる「率意」の書である。28行324字。王羲之の書の真偽鑑定を行った唐の褚遂良は「晋右軍王羲之書目」において行書の第一番に「永和九年二八行 蘭亭序」と掲載している。自らが能書家としても知られる唐の太宗皇帝が王羲之の書を愛し、その殆ど全てを集めたが、蘭亭序だけは手に入らず、最後には家臣に命じて、王羲之の子孫にあたる僧の智永の弟子である弁才の手から騙し取らせ、自らの陵墓である昭陵に他の作品とともに副葬させた話は、唐の何延之の「蘭亭記」に載っている。したがって、王羲之の真跡は現存せず、蘭亭序もその例にもれない。しかし、太宗の命により唐代の能筆が臨模したと伝えられる墨跡や模刻が伝えられている。本書が誕生するまでは漢代以来の隸書体が主流であったが、王羲之が当時徐々に貴族達に好まれつつあった楷書、行書、草書を用いて書を書いたことにより、新しい書体が人々に広がるきっかけとなった。

蘭亭序

王羲之

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以爲流觴曲水列坐其次雖無絲竹管弦之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀

○「嶺」は、古く「嶺」と通じて用いられた

宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣向之所欣俛仰之間以爲陳迹猶不能不以之興懷況脩短隨化

○「快然」は「快然」が正しいとされる

終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每攬昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生爲虛誕齊彭殤爲妄作後之視今亦由今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之攬者亦將有感於斯文

○「由」は「猶」と通用

蘭亭序らんでいじよ

永和九年、歳としては癸丑きちうに在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に會す。禊事けいじを脩をさむるなり。群賢ぐんけん畢ことごとく至り、少長せうちやう咸みな

集まる。此の地に、崇山すうざん峻嶺しゆんれい、茂林もりん脩竹しゅうちく有り。又、清流せいりゅう激湍げきたん有りて、左右に映帶えたいす。引きて以て流觴りゅうしやうの曲

水と爲(な)し、其の

次に列坐す。糸竹管弦の盛せい無しと雖いども、一觴一詠、亦以て幽情を暢叙(ちやうじよ)するに足る。是の日や、天朗ほがらかに氣清く、惠風けいふう和暢(わちやう)せ

り。仰いで

宇宙の大を觀み、俯しては品類の盛んなるを察す。目を遊ばしめ懷おもひを騁はする所以ゆゑんにして、以て視聽の娛しみを極むるに足れり。信まことに樂しむべきな

り。夫それ人の相与あひともに

一世いつせいに俯仰(ふきやう)するや、或いは諸これを懷抱(かいほう)に取りて一室の内に悟言(ごげん)し、或いは託する所に因寄(いんき)して、形骸の外ほかに放浪す。趣舍(しゆしゃ)万

殊(しゆ)はんしゆにして、

静躁(せいそう)せいそう同じからずと雖も、其の遇ふ所を欣び、暫しばらく己おのれに得るに当たりては、快然(かいぜん)として自みづから足り、老おいの将(まさ)さに至らんとするを知らず。

其の之ゆく所既に倦(けん)うみ、情(じやう)

事に隨ひて遷(せん)うつるに及んでは、感慨(かんがい)これに係(か)かれり。向(むか)さきの欣ぶ所は、俛仰(ふきやう)の閑(かん)に、以(も)つて陳迹(ちんせき)と爲なる。猶(なほ)これを以て懷おもひ

を興(きん)おこさざる能はず。況(けい)んや脩短(しゅうたん)化(か)かに隨ひ、

終つに尽くるに期(き)するをや。古人(こじん)云(い)へり、死生(しせい)も亦また大(だい)なりと。豈(あ)に痛(いた)ましからずや。毎(まい)つねに昔人(せきじん)感(かん)を興(きん)おこすの由(よし)を攬(らん)みるに、一契(いつけい)を合(あ)わ

せたるが若(ごと)し。未(いま)だ昔(か)かつて

文(ぶん)に臨(りん)んで嗟悼(さたう)せざるはあらず。之(これ)を懷(くわい)こころに喻(よ)きこと能(な)はず。固(こ)まことに死生(しせい)を一つにするは虚誕(きよたん)きたたり、彭殤(ほうしやう)を齊(せい)ひとしくするは妄作(わうさく)も

うさくたるを知る。後(のち)の今(いま)を視(み)るも、亦また由(よし)なほ今の

昔(むかし)を視(み)るがごとくならん。悲(かな)しいかな。故(ゆ)に時人(じじん)を列叙(れつじよ)し、其(その)述(じゆ)ぶる所を録(ろく)す。世(よ)殊(じゆ)に事(こと)異(い)ことなりと雖も、懷(くわい)おもひを興(きん)おこす所以(ゆゑ)んは、其(その)致(せい)むね一

いつなり。後(のち)の攬(らん)みる者(もの)も、亦(また)将(まさ)さに

斯(こ)の文(ぶん)に感(かん)ずる有(あ)らんとす。



# 五、蘭亭之記

(2020年4月伊勢市に寄贈)

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也羣賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣所欣悅仰之間以萬陳迹猶不能不以之興懷況脩短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每攬昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生為虛誕齊彭殤為妄作後之視今亦由今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之攬者亦將有感於斯文

大正丙辰七月十三日七十二叟橋陰正環臨

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣(欠落)向之所欣俛仰之間以為陳迹猶不能不以之興懷況脩短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每攬昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生為虛誕齊彭殤為妄作後之視今亦由今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之攬者亦將有感於斯文 大正丙辰(大正五年)七月十三日七十二叟

橋陰正環臨

橋陰正環臨



# 六、般若心經

(2020年4月伊勢市仁壽贈)

般若波羅蜜多心經 沙門玄奘奉 詔譯  
 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色  
 受想行識上法如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌  
 身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦  
 無得無所不得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸  
 佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等呪  
 能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜多呪即說呪曰

羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶

臨書百枝之一時丙辰夏七月十三日七十二翁橘陰正環

## 般若波羅蜜多心經 沙門玄奘奉 詔譯

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色  
 受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌  
 身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦  
 無得無所不得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸  
 佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等呪  
 能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜多呪即說呪曰

羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶

臨書百枝之一時丙辰(大正五年)夏七月十三日七十二翁橘陰正環

橘陰正環



翁橘陰正環

● 度会常幸 わたらい つねゆき

久志本梅莊(叟)

くしもとばいそう 田器派 山田

【別称】常幸、公慶、梅叟、師竹軒

【享年没年】72歳 1855 安政2〜1927 昭和2

【生地】東京 四谷【住地】山田↓四谷

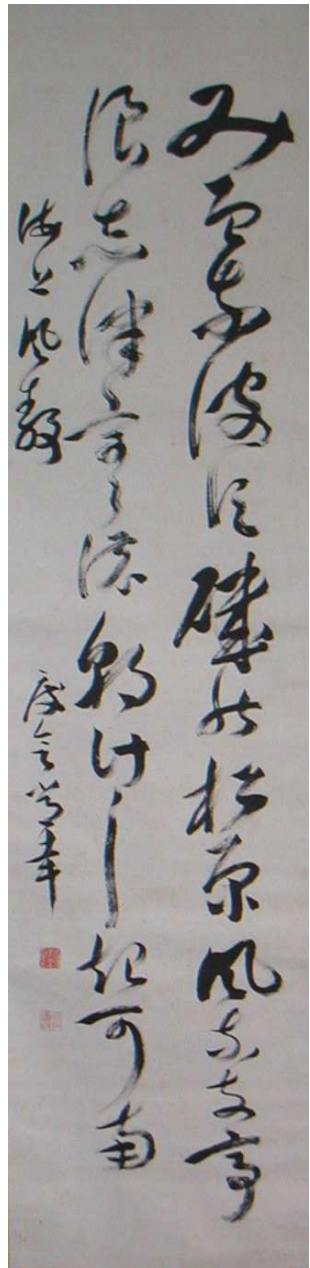
【系譜】常庸の男

【略歴】外宮禰宜に補せられ正五位上に至ったが、明治4年官制改革の爲め職を解かれ、明治18年父と共に東京に移住した。学習院教授となり、また高松宮殿下の命を拝し、後又澄宮殿下に法帖を上った。其他貴顕紳士の其門に入り教を受けるもの多かつた。資性温雅にして風流を嗜しみ、各地より揮毫を乞うもの多く、氣が向けば筆管を携えて諸国を漫遊した。

【書画暦】幼にして画を松田雪柯に学び、後更に碑帖により百家に出入りし、研鑽益深く、遂に斯道の奥義を極むるに至った。

# 七、大人和歌

(2020年4月伊勢市に寄贈)



みそなわのうみにきざきのかぜにあきて

浪志津亭ら濃なみしぐてらの朝けし記可南

海上風静



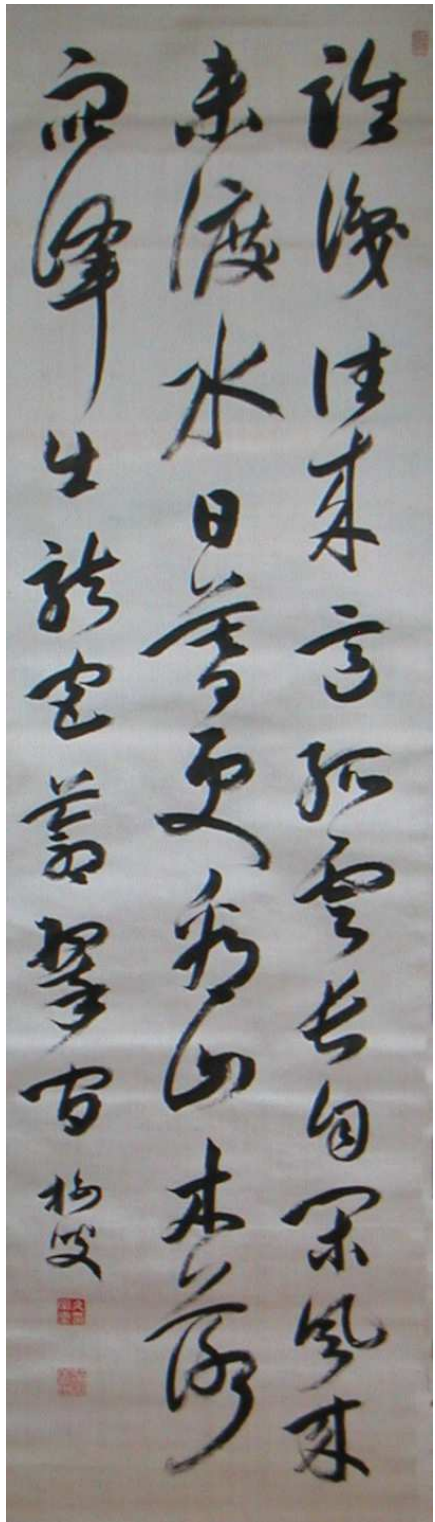
度会常幸



度会常幸大人和歌

# 八、草書五古

(2020年4月伊勢市に寄贈)



誰識往來遵孤雲長自閑風來

未渡水日暮更看山木落

衆峰出龍宮蒼翠間

梅叟



久志本梅叟君草書五古



清間(ほかは閑だが)堂雅主属(ハ)囑)題署 八二叟眉峰書

# 九、蘭亭記

(2020年4月伊勢市に寄贈)

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣向之所欣俛仰之間以為陳迹猶不能不以之興懷況脩短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每覽昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生為虛誕齊彭殤為妄作後之視今亦猶今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之覽者亦將有感於斯文

甲子槐夏臨於師竹軒時暑甚試行書墨軋羊渾共拙不可見也 梅叟

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣向之所欣俛仰之間以為陳迹猶不能不以之興懷況脩短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每覽昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生為虛誕齊彭殤為妄作後之視今亦由今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之覽者亦將有感於斯文

甲子(924大正13)槐夏臨於師竹軒時暑甚拭汗書墨軋カニ滯其拙不可見也 梅叟

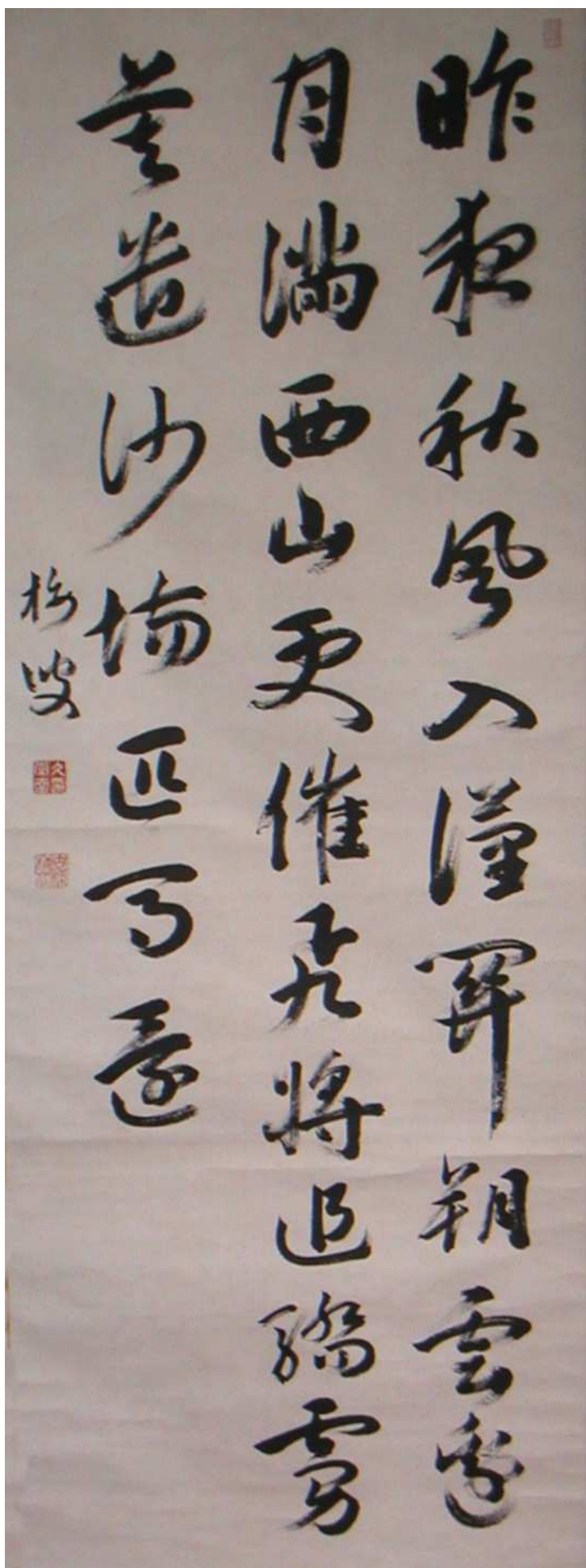
梅叟



# 十、秋之詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)

昨夜秋風入謹閑朔雲邊  
月滿西山更催飛將追驕虜  
莫令遺のこす沙場匹馬還



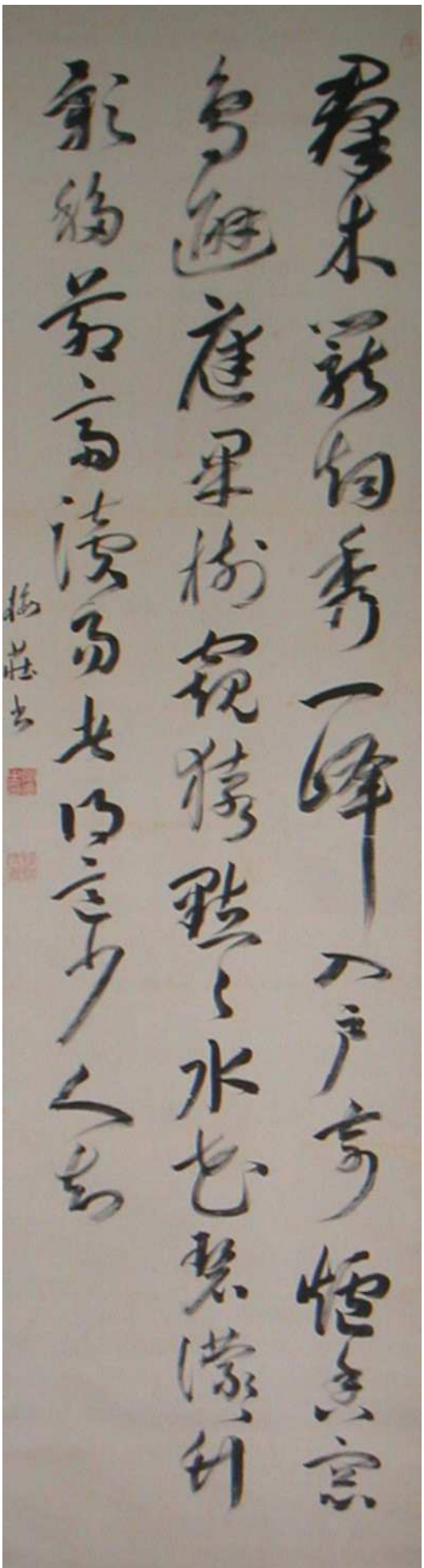
梅叟



梅叟

十一、行草書五律

(2020年4月伊勢市に寄贈)



群木籠煙秀 一峰入戶寄爐香窓  
鳥避庭果樹窺うかがう猿默々水花碧濛こさめ竹  
影移苑齋讀易者得意少人知

梅莊書

梅莊書

久志本梅莊行草書五律

清閑堂藏

久志本梅莊 行草書五律 清閑堂藏

乙卯六月眉山居士題宮

乙卯(大正四年)六月 眉山居士題宮



# 十二、二行詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)

山昏月未明  
木落霜初降  
何處夜歸人  
一犬吠深巷

梅莊書



山昏月未明  
木落霜初降  
何處夜歸人  
一犬吠深巷

梅莊書



梅莊書

# 十三、五言律詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)

物上遊人役寂、  
 意去居日自暮。  
 雲霞後斜陽社飲、  
 休明花飛趁蝶池。  
 葉墮鷺魚好、  
 了公家事休令更到廬。

丙申七月秋 田雅契 書

梅莊久常幸

紛まぎれる々謝人役寂々戀吾居神雨春霽う後斜  
 陽社飲ゆる休やか岸花飛趁お蝶池葉墮おちる鷺魚  
 好了公家事休令更到廬。

丙申(明治二九年)七月秋田雅契属書

梅莊久常幸



梅莊久常幸

十四、七絶

(2020年4月伊勢市に寄贈)

草渾水暖魚迷窟花落泥香燕  
 作家別有清森映眉目讀書窓外  
 幾竿斜

梅莊學人書

草渾まて水暖魚迷窟花落泥香燕  
作家別有清森映眉目讀書窓外

幾竿斜

梅莊學人書

梅莊學人書

十五、一行詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)

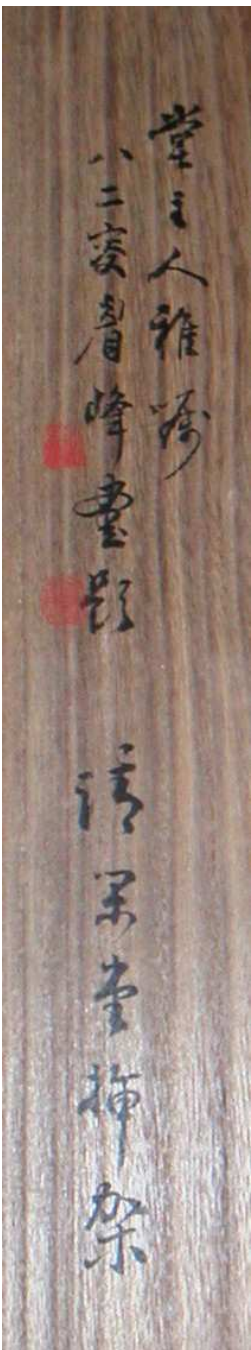


萬歲壽而かも康

癸亥(大正十二年)新春



梅莊書



堂主人雅囑

八二叟眉峰書題

清閑堂挿架

# ● 小俣 蠖 庵

おばた かくあん 篆刻・鉄筆派 常盤町

【別称】 孟寛、孟獎、茂四郎、子猛、名六、栗齋、紫翁

【享年没年】 73歳 1765 明和2 / 1837 天保8

【生地】 川崎世古(常盤町)

【住地】 横橋 八日市場

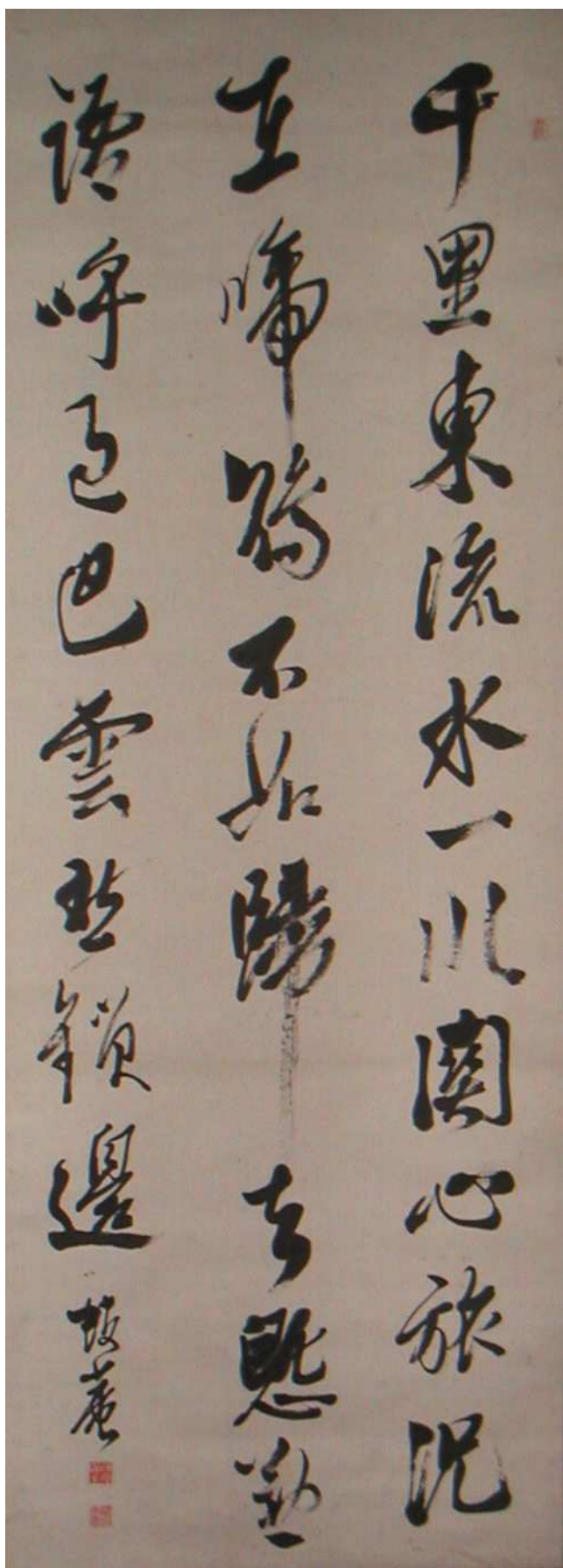
【略歴】 外宮神樂職の家に生まれる。生家は常盤町にあり味噌商であった。豊受宮の神樂(かぐら)職。世々外宮神樂職にして、宮掌大内人に補し、また家業として味噌を売った。

【書画暦】 江戸中期の篆刻家。南画派。書画を能くし篆刻をに学んで一家を成す。性清雅博識、書画を好み、富裕であつたので之を貯うるもの多く、従つて其鑑識に長じた。画を越後の釧路雲泉に学びて最山水に工みに、書は蘇子瞻、趙子昂、董玄宰に出入りして能く其法を得、篆刻を芙蓉門の源維良に従い其妙を得、又、玉隣上人に就いて明樂(江戸期に明朝から日本に伝えられた廟堂(びょうどう)音楽の名称)をもよくし。孰れも皆其堂奥に入り門下頗多く歳多の秀才を輩出した。福井端隱(篆刻)、古森痴雲(南画派)、中西笠山(篆刻)、阪田葛丘(篆刻)等其尤なるものである。人格崇高、始終温容を以つて人に接し、恬淡にして寡慾、慈悲を悦び、人の賦難に遇いたるを聞き、忽ち二十餘枚の画を爲して其人に贈り、以て復興の資となさしめ、青木木米(京都の陶工)の流滯して一妓楼にし、隠るるを聞き、之を救いて其志を翹へしめた。又、嘗て中山寺書画会席上古森厚保(痴雲、南画派)の一石を携えて鉛筆を請えるに際し、月夜に彫らんか又は闇夜に彫らんかと戲言しながら懐中にして水月觀の三字を刻し、運刀絶妙を極めたとの逸話もある。

少壮の時より列子を好み、其數 一百に達した。蠖庵とは晩年貧困にして居室身を容るるに艱かりし頃の称にて、主として書画に用い、篆刻には栗齋を称した。

十六、七律詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)



千里東流水 一川関心旅況

在啼鵲ほととぎす 不如歸去慇懃

語呼過迫雲默銷けす邊



蠖庵

# ●福井端陰

ふくい たんいん 篆刻・鉄筆派 浦口町

【別称】武熙、末彰、帯刀、孔彰、凹陽、両洗

【享年没年】85歳一〇〇〇享和元一〇〇五明治18

【生地】上中ノ郷

【住地】一志久保、八日市場

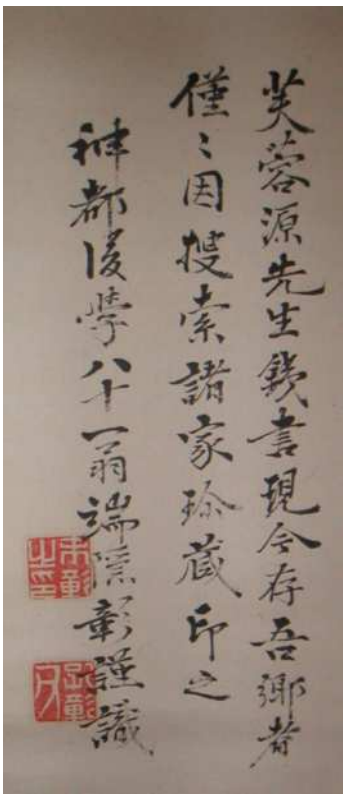
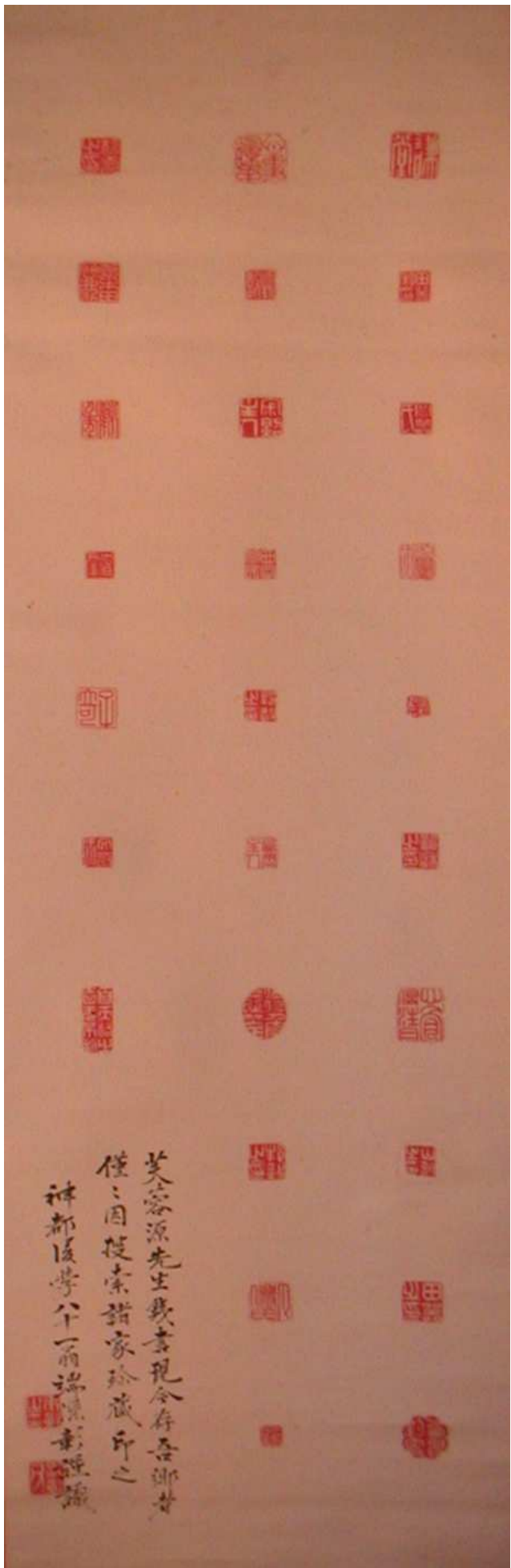
【系譜】榎倉武繁の次男、帯刀の養嗣

【略歴】外宮権禰宜 正四位上に至った。茶道は初め千宗室の門に入り、後藪内紹智に従い表裏両道を極めた。

【書画暦】小俣蟻庵に就いて書画並びに篆刻を学ぶ、特に篆刻に妙技を揮ひ、専ら皇国古印体及漢の古体を宗として其の名 一世に高く、贅シにえを其の門に執るものが多かつた。

# 十七、高芙蓉先生印影

(2020年4月伊勢市仁寄贈)



高芙蓉先生印影

芙蓉源先生鐵筆現今存吾鄉者  
 僅々因搜索諸家珍藏印之  
 神都陵學八十一翁端陰彰謹識





高芙蓉 こうふよう

生没年 享保七年—天明四年(一七二二—一八四)

六十三歳

職種 儒者 文人 篆刻家 画家

常陸宍戸藩の画員

出自 医師大島尤軒の子 甲斐国高梨郡の人

称号 名孟彪 字孺皮 通称逸記・近藤斎官 画名

高芙蓉 号芙蓉・中岳画史・富岷山房・氷壑

山人・菡萏居

師事 柳沢里恭・池大雅〔書・画〕 谷文晁〔画〕

門下 鈴木鳴門・鈴木少蓮〔画〕

事蹟 京都に出て儒学・金石学・篆刻を研究して日

本の印学を基礎づけ、印聖と称された。『篆原』

『古今公私印記』『印章例考』『招印叢』『游襄日

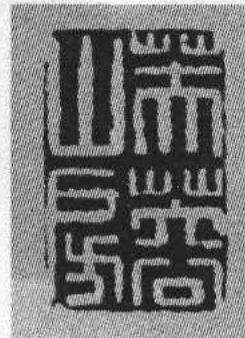
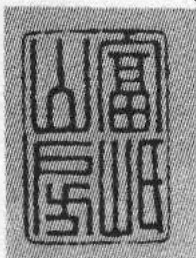
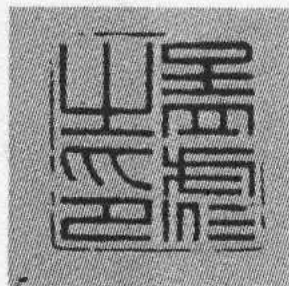
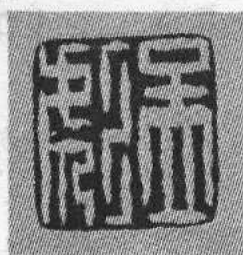
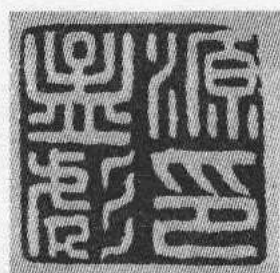
記』など著。書・画もすぐれ、当時の文人と

交わり、指導的役割を果たす。晩年、江戸に

移住。

備考 有職故実に精通。出生地にちなみ、高氏を称

す。しばしば姓氏を変えた。



# ●松木偉彦

まつき くすひこ 篆刻・鉄筆派 田中中世古

【別称】五嶺、子温、香雲・五峰、松年

【享年没年】74歳1844 弘化元〜1917 大正6

【生地】田中中世古(本町)【住地】同、宮後

【系譜】武彦の男、品彦の養子

【略歴】嘉永2年外宮権禰宜に補せられたが、明治4年神宮改革によりて一旦、解職となり、更に同禰宜となりまた内宮にも奉仕した。また神宮の故典儀式に通曉し、殊に殿内の秘事を知れるは当時其右に出づる者無く、明治22年の正遷宮に際して、祭主の宮の内奏によりて顧問を迎付けられた。著書に『五峰印譜』がある。資性温雅、読書を松田雪柯に、又大坪流の馬術を鳥羽藩の林又蔵に習った。

【書画暦】南画を谷口露(あい)山に学んだ。篆刻を福井端隠に学び、最其蘊奥に達したのは篆刻で、高芙蓉の伝統を受けたのは栗齋(小俣蠖庵)、端隠並びに偉彦である。嘗つて(かつて)伊藤博文の爲めに石印を刻し、博文よりは扁額を書して之に酬いられた。

# 十八、顛書

(2020年4月伊勢市に寄贈)

小學琴書偶愛清淨開卷有得便欣  
 然忘食見樹木交映時鳥變聲亦また後  
 歡然有喜常言五六月臥ふし北窓下過  
 涼風暫至自謂義皇上人

明治十七年六月十四日篆  
 醉古堂劍掃之詩于香雲書房  
 松偉彦

小學琴書偶愛清淨開卷有得便欣  
 然忘食見樹木交映時鳥變聲亦また後  
 歡然有喜常言五六月臥ふし北窓下過  
 涼風暫至自謂義皇上人

明治十七年六月十四日篆  
 醉古堂劍掃之詩于香雲書房  
 松偉彦

明治十七年六月十又四日篆  
 醉古堂劍掃之詩于香雲書房  
 松偉彦

# ● 山口穎菴(庵)

やまぐち てんあん 諸派 一志町

【別称】凸凹、凹巷、揚菴、穎菴陳人

【享年没年】58歳—1772安永元—1830文政13

【生地】一志久保

【住地】

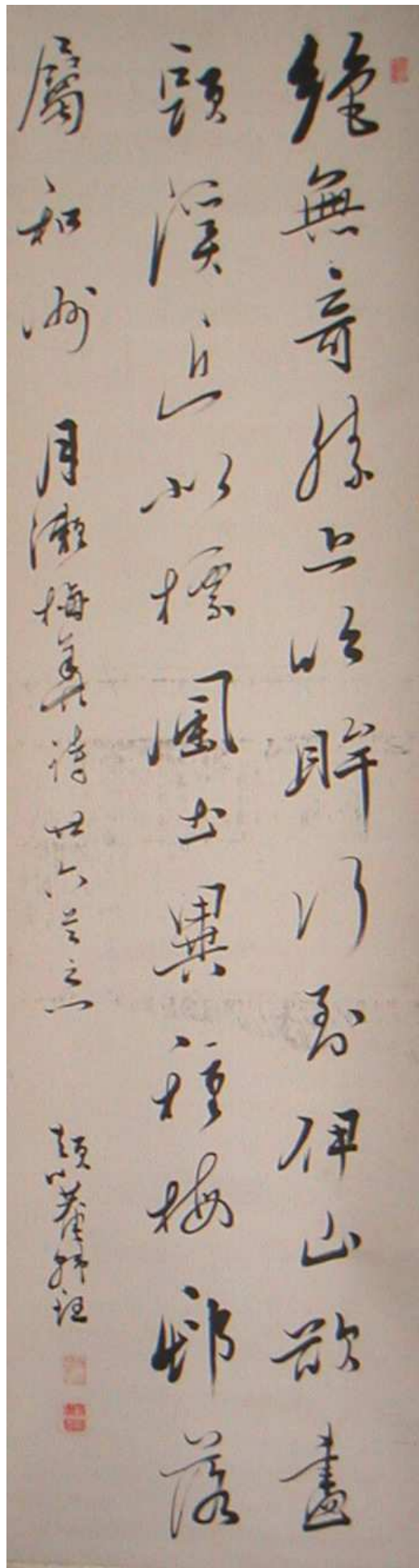
【系譜】遠山文圭の次男、豹山の養子

【略歴】

【書画暦】初め橋村痴亭に従ひ、後に皆川淇園の門に入り、詩を菅茶山に学んだ。博学多識にして詩名海内に重く、漢魏六朝より唐宋以後の諸家まで窺はざるは靡かった。同人河崎良佐、宇仁館兩航、西村維祺、北條霞亭、池上鄰哉、孫福包蒙、東垣軒等と恒心社を設けてその盟主となった。官を勤むるものあるも辞して就かず。酒を蒙り痛飲日夜に涉り、又山水の癖あり、釣を祭しみ悠々自適した。文致二年月瀬に遊びて詩集月瀬梅花帖を著し、天下の知友に頌った。これは拙堂の月瀬記勝の先備をなしたものである。  
墓写真あり

# 十九、書

(2020年4月伊勢市に寄贈)



絶無奇藤わく上吟眸ひとみ以行到伊山欲盡  
 頭溪近似標風(土に)異種梅邨落  
 属和洲 月瀬梅義詩廿六首之一



穎庵韓  
○

# 廿、詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)

閑想還知勝有機架空樓閣或依稀籬まがき如○眼教  
 童補筆似雞こ毛為容揮書畫閱年皆古色竹花承日自  
 秋輝此時○  
 穎菴老人

閑想還知勝有機架空樓閣或依稀籬まがき如○眼教  
 童補筆似雞こ毛為容揮書畫閱年皆古色竹花承日自

秋輝此時○  
○  
○  
○  
○  
一榻と新涼路後衣

穎菴老人

穎菴老人

山口穎庵先生詩

山口穎庵先生詩

○土井聱牙 といごうが 津

【別称】有恪、士恭、松徑

【享年没年】64才1809文化13～1880明治13

【生地】〔住地〕津

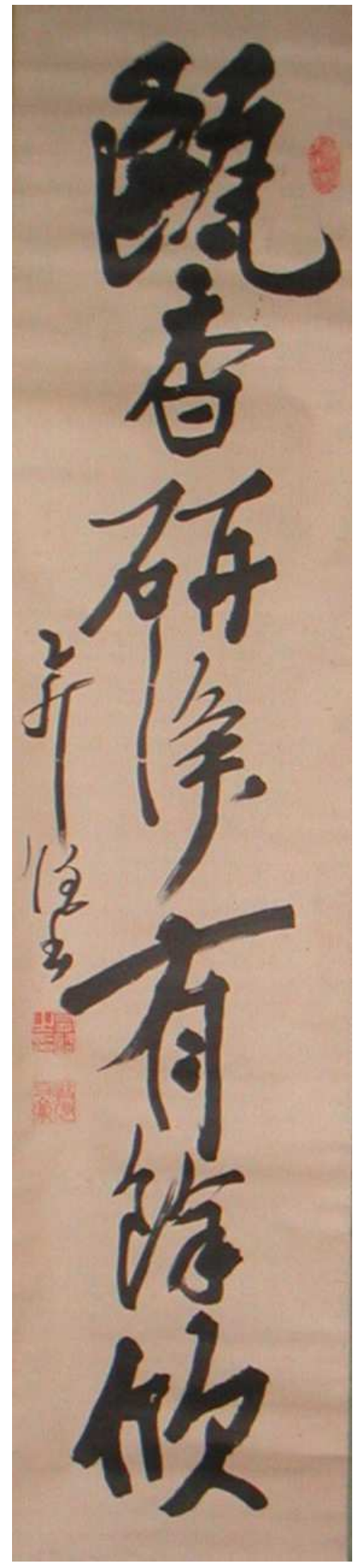
【系譜】

【略歴】幕末維新の津藩儒学者、漢学者。川村竹坡・齋藤拙堂に学ぶ。藩校有造館助教・講官。学風は清朝の考証学を尊ぶ。

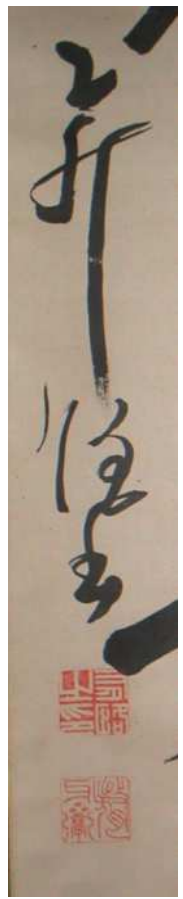


廿二 一行詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)



既はたして香研淨有餘欣



聲牙書



土井聲牙先生一行

# ● 矢土錦山

やつち きんざん

田丸町

【別称】勝之、實夫

【享年没年】72歳1849嘉永2〜1920大正9

【生地】田丸

【住地】飯南郡射和村

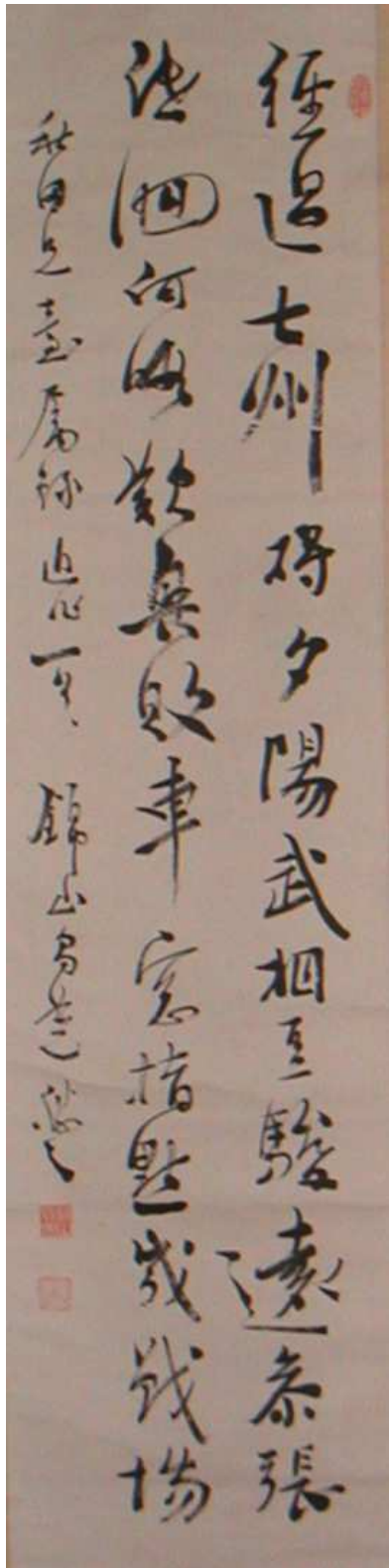
【系譜】源八の弟

【略歴】25歳の頃上京して賞勳局の官吏となり、森春濤（漢詩人）の門に入り巖谷一六、川田甕江等の名士と交を結び、名声大に揚り、退官後、伊藤博文に漢詩を授け、其別荘滄浪園を案じて、扁額を揮毫したと云ふ。常に西園寺公望其他名流と詩酒徵逐し、嘗て末松謙澄をして、森槐南に比すれば、霸氣満々なりと評せしめた。

【書画暦】幼より學問を好み、十七八歳の頃、藤川三溪、松田雪柯につきて漢学を学び、後、津藩の名儒土井賛牙の門人となり、詩文をよくし、且書に巧みであった。

# 廿二、七州經過之絶句

(2020年4月伊勢市に寄贈)

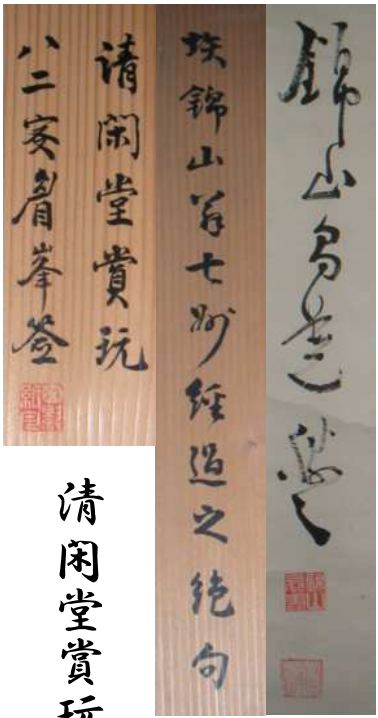


經過七州得夕陽 武相互駿遠參張  
 低何暇歎をゆく興敗 車窓指默威み戰場

秋田兄壹属録近作一首

錦山○○勝之

(矢土を1字にした字) 錦山翁七州經過之絶句



清閑堂賞玩 八二叟眉峯簽

# 廿三、七律詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)

安心居士齡正達 四十古○強仕今日 初老居士近○多  
 病古今人子相及 韓昌黎不吾欺也 既疾而かも養生未若 攝生于未  
 病然為 之當賢于已居士 近度妓昵ちかく醫いやす以藥 易酒省飲宴之費  
 以構聖賢之書此 是居(古ま)至(おおき)新學問小○濟

秋田賢兄一叟  
 錦山○勝之

秋田賢兄一叟  
 錦山○勝之

秋田賢兄一叟

錦山○勝之

# ● 広瀬淡窓

ひろせ たんそう 大分

【別称】建、子基

【享年没年】75歳 1782 天明2 - 1856 安政3

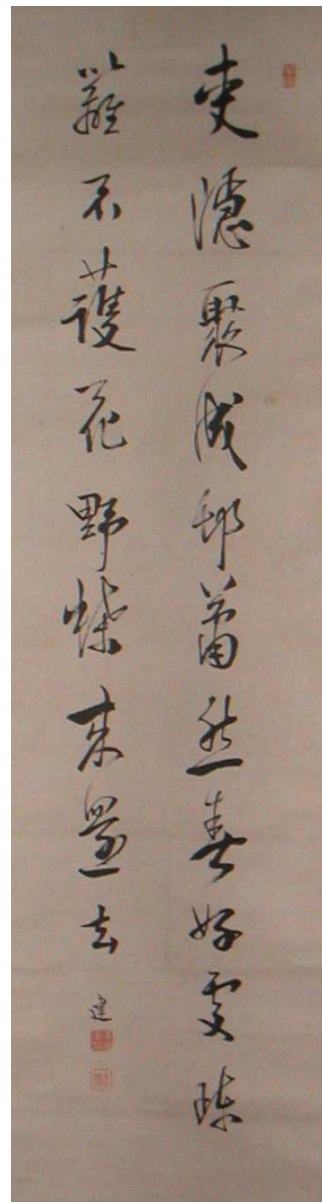
【生地】豊後国日田(大分) 【住地】

【系譜】

【略歴】儒学者で、漢詩人、教育者。筑前国の亀井南冥、亀井昭陽父子に師事する。豊後国日田に私塾を開き桂林荘のち咸宜園かんぎえんとし日本最大級の私塾となった。古市古楼備前屋主人で敬神家の**太田小三郎**が幼時、朱子学を学んだ。

# 廿四、春好五言絶句

(2020年4月伊勢市に寄贈)



吏隱聚成邨蕭然春好處疎

籬まがき不<sub>レ</sub>復花野蝶來還去



建



淡白廣瀬先師春好五言絶句

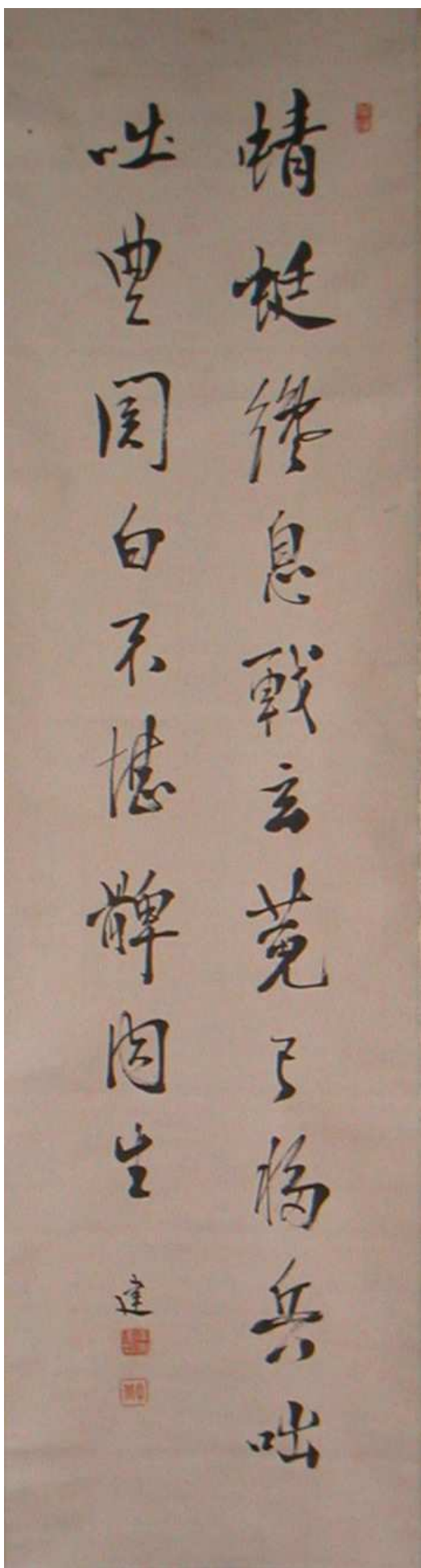


今歲秋田雅契壽齋新築祝之以贈此幀チヨウ

徑時明治四十一年仲冬長山(雪柯四七言絶句にも記載あり)老士人識

廿五、二行詩

(2020年4月伊勢市に寄贈)



蜻蜒せいてい(飛ぶ範囲が広い) 終息戦玄菟メン 己移兵吐しかる  
 吐豊関白不堪髀もも肉生



建

# ● 土方泰山

ひじかたたいざん

土佐

(2020年4月伊勢市に寄贈)

【別称】大 一郎、楠左衛門、久元、泰山

【享年没年】86歳—833天保4—1918大正7

【生地】土佐

【系譜】土佐藩郷士土方久用の子。土方与志(久敬)の祖父でもある。

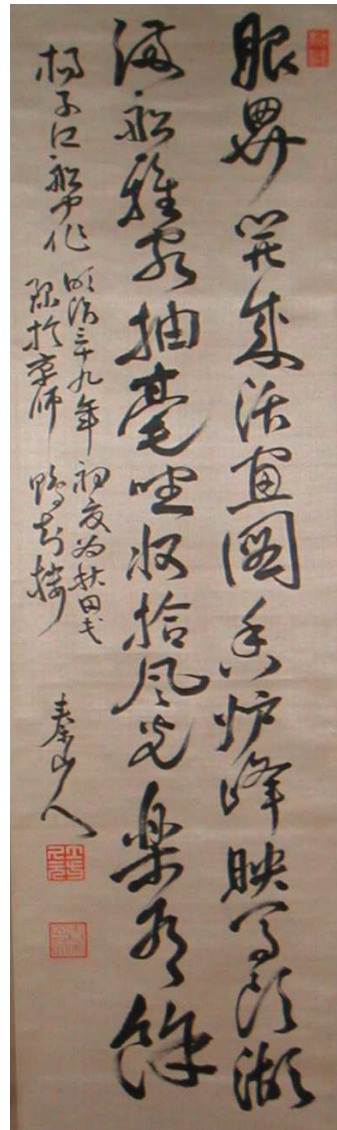
【書画暦】

【略歴】幕末・明治の志士。神苑会評議員。政治家。正二位伯爵。土佐勤皇党に参加し、藩命に因つて上洛し、三条実美の信を得て学習院御用掛となり「七卿落ち」に随行し、中岡慎太郎と共に薩長同盟に尽力し、維新後は明治天皇に信任されて宮内大臣・宮中顧問官・枢密顧問官などを歴任した。のち明治政府に出仕し、のち元老院議員・宮中顧問官・枢密顧問官・農商務大臣等を歴任した。大正初期には「生きたる勤皇討幕史」として有名で、幕末の様子を描いた『回転実記』を著している。かの『銭形平次』の作者野村胡堂も報知新聞記者としてインタビューし、その修羅場を潜った迫力に肝を冷やしたことを記している。彼は、大正から昭和にかけて、築地小劇場を拠点に新劇運動を興した演出家。



# 廿六、詩書

(2020年4月伊勢市に寄贈)



眼界開成活畫圖  
香爐峰映馬頭湖  
滿船雅客抽毫坐  
收拾風光樂有餘

楊子江船中作 明治三十九年 初夏為秋田氏

錄於京師

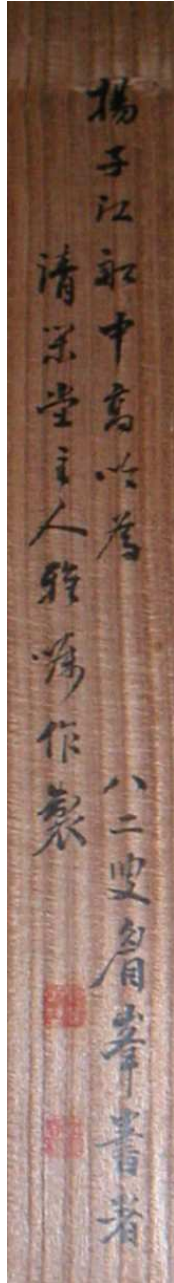
鴨知樓



秦山人



土方泰山雅君詩書

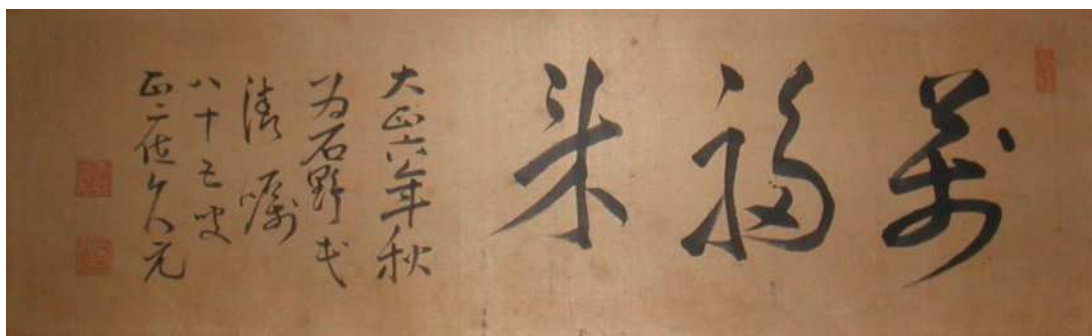


揚子江船中高吟為

八二叟眉峯書著

清閑堂主人雅囑作製

廿七、扁額 萬福來



萬 福 來

大正六年秋

為石野氏 (護てしよるか?)

清嘯 (委囑ひとにまかせに頼むことの美称)

八十五叟

正二位久元

二、伊勢度会外書家之部

# ○亀井南冥 かめいなんめい 福岡

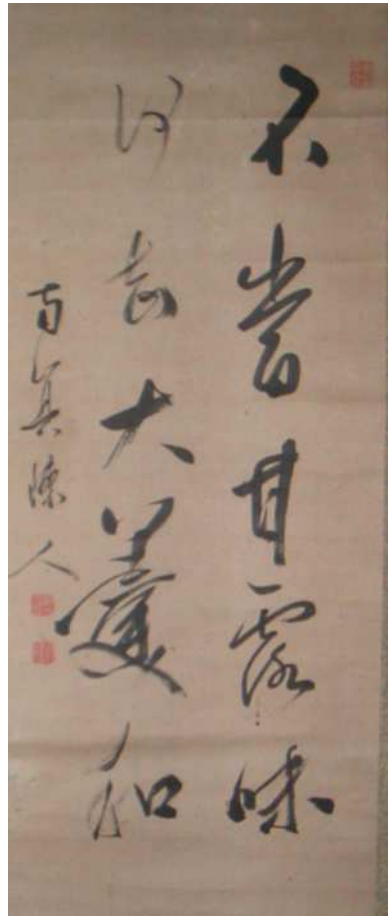
【列称】魯、道載、主水、【享生没年】72歳1743寛保3—1814文化11【生地】筑前国姪浜（現在の福岡市）  
【系譜】筑前国早良郡姪浜村の村医亀井聴因の長男

【略歴】江戸時代の儒学者で、医者、教育者、漢詩人。亀門学の祖。幼少より父のもとで学問に励み、青年にいたり、肥前蓮池の黄檗僧大潮元皓に師事し、更に都へ上つて吉益東洞に師事したが、すぐに永富独嘯庵の門下に移る。永富は山脇東洋の高弟で、山脇周南に学んだ人物である。よつて、南冥は儒学者としては、園学派（古文辞学）に属し、医学では山脇東洋の流れを汲むことになる。

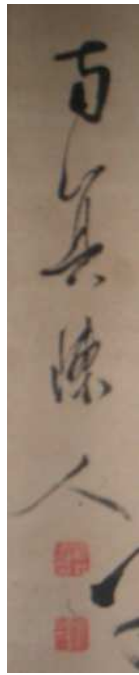
永富の門下生時代の南冥は、師の著作『漫遊雜記』に序文を提供する程の秀才として名を馳せている。また、小石元俊（蘭学者）・小田享叔（儒学者）とともに「独嘯庵門下の三傑」と呼ばれたという。帰郷後は父と共に博多唐人町に開業する傍らで1762宝暦12には私塾を開き、多くの門人を集めた。一方で、宝暦・明和期にはたびたび長崎を訪問して時代の新風に触れ、安永期の京坂に遊んでは大坂の混沌詩社にも出入りしている。1780安永7、福岡藩主黒田治之は南冥を儒医として採用し、1784天明4には治之の遺言（治之は1782に急死）で、南冥は新設された二つの学問所の一方である甘棠館の祭酒（学長）に就任する。

同じく1784天明4、有名な志賀島の金印（倭奴国王印）が発見される。この発見に対し南冥は素早く『後漢書』東夷伝を引用して金印の由来を説明、次いで『金印弁』を著して金印についての研究を行った。もう一方の学問所である修猷館の学長に就任していた竹田定良（朱子学者）も『金印議』を著したが、内容は南冥の説明の域を大きく出ないもので、結果として南冥の名を高めた。また南冥は金印発見の報と印文並びに鑑定書を全国の学者と知人に送っており、これをもとに上田秋成や藤貞幹なども独自に金印研究を行っている。その後、1790寛政2に寛政異学の禁が出され、幕府の昌平坂学問所で朱子学以外の学問が禁止されると、各藩にも影響が出て、護園学派に属する南冥の立場は危うくなった。修猷館派の攻撃を受けて1792寛政4、ついに失脚し、南冥は甘棠館祭酒を解任のうえ、蟄居禁足処分となる。1798寛政10には甘棠館が焼失し、それにもない甘棠館廃止。教官は解職され、生徒は全て竹田定良の修猷館に編入となる。失脚と学校の消滅に南冥は失意に沈むこととなるが、やがて息子の昭陽を中心に私塾として亀井塾が再開され、南冥もそこで指導にあたった。南冥・昭陽父子の下には九州にとどまらず日本各地から弟子が訪れ、多くの優れた人材が育った。1814文化113月2日、自宅の失火により死去。伝えられるところでは猛火の中で端座して焚死したという。

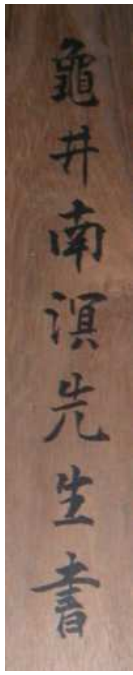
廿八、書



不當甘露味  
何知大羹あつもの和



南冥陳人



龜井南冥先生書



清閑堂主君囑題 八一叟 眉峯堂

# ○日下部鳴鶴

くさかべ めいかく 滋賀

【別称】東作、子暘、野鶴、鶴叟

【享年没年】八十五歳一837 天保8〜1922 大正11

【生地】滋賀県

【書画暦】書家。初め巻菱湖・貫名菘翁の風を慕うが、楊守敬の来朝により、大きな影響を受ける。のち中国に遊び、兪曲園・吳大澂・楊見山・吳昌碩らと交わった。その格調高い書風で近代書道界に多大な影響を与える。

廿九、七絶

輕占林一味閑幽情元自  
 異塵寰踐棋敲罷忽呼  
 酒人在月明蟲語間  
辛卯小春錄舊作 林下脱泉

暫しばらく占林(泉脱字)一味閑幽情元自  
 異塵寰カン踐ふむ棋敲たたく罷忽たちまち呼  
 酒人在月明蟲語間

辛卯小春錄舊作 林下脱泉  
 輕占林一味閑幽情元自  
 異塵寰踐棋敲罷忽呼  
 酒人在月明蟲語間

鳴鶴仙史 東作

日下部鳴鶴翁書七絶  
輕占林一味閑幽情元自

日下部鳴鶴翁書七絶  
 暫占林泉一味閑(〓間)

# ○紫野の栗山 しばのりつぎん 讃岐

【別称】邦彦、彦輔、彦助、古愚軒

【享年没年】七十二歳—135 享保20—1807 文化4

【生地】讃岐

【略歴】江戸中・後期の儒者。昌平黌に学び、阿波侯に仕える。のち松平定信に召されて幕府に任官、朱子学を唱え官学とする。詩書も能くし、尾藤二洲・古賀精里と共に「寛政の三博士」と称される。内宮の林崎文庫に対し、積極的な整備策を行つた内宮権禰宜の蓬萊尚賢ひさかたを自署の「林崎文庫の記」で称賛した。



世、一行詩



湖來春月涼



風流栗山

# ○杉 聴雨

すぎ ちようう 山口

【別称】重華、孫七郎

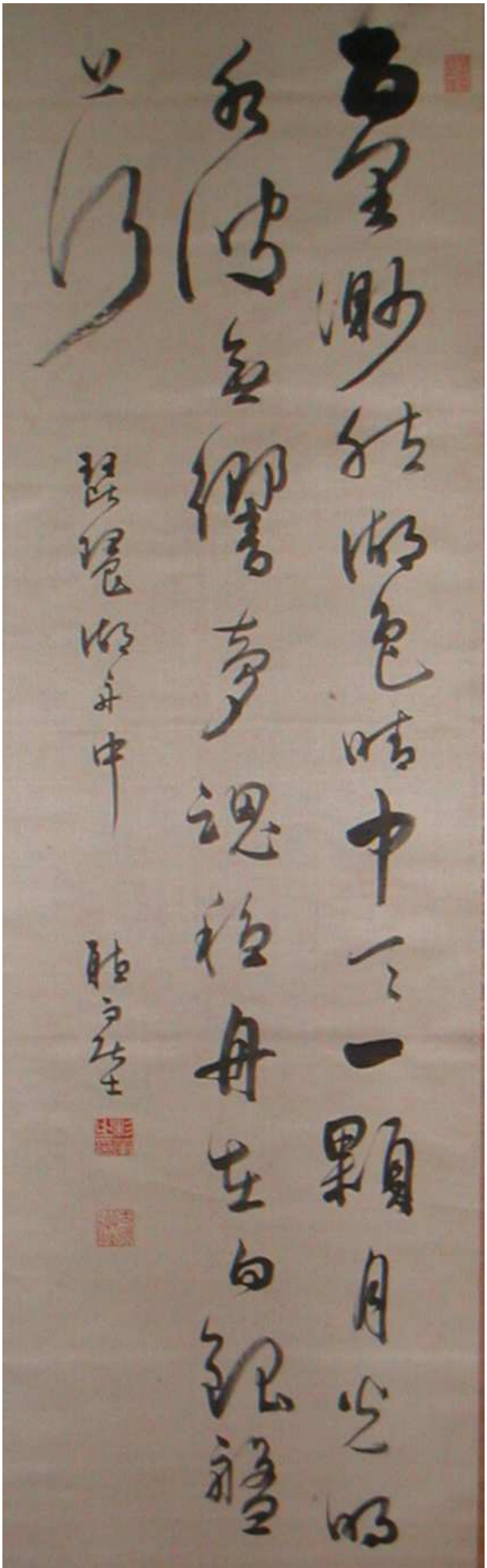
【享年没年】86歳—834 天保5—1620 大正9

【系譜】山口藩士

【略歴】子爵。維新に功あり、諸官を経て宮内省御用掛・枢密顧問官・議定官に至る。

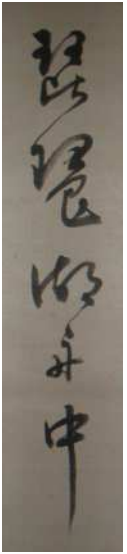
【書画暦】詩を能くし、書画に秀でる。

卅一、琵琶湖七絶



古里渺ヒョウ然湖色晴 中天一顆ヒツ月光明  
水波無響夢魂種 舟在白銀盤

上行



琵琶湖舟中



聽雨居士



於聽雨先生琵琶湖七絶

# ○永坂石埭

ながさか せつたい 名古屋

【別称】周二、玉池舫人・曼梅主人等

【享年没年】80歳—84弘化元—1924大正13

【生地】〔住地〕名古屋

【系譜】

【略歴】書家・医師・漢詩人。

【書画暦】漢詩を鷺津毅堂に、詩を森春濤に学び、春濤門四天王の一人と称された。

書画・篆刻に秀で、その書風は石埭流の名で知られる。

世二、七律詩

酒醒微覺暮寒加聽到梅花  
白處家廬僅一重春月透出  
琴如雪響爬沙

酒醒微覺暮寒加聽到梅花

白處家(字がない) 蓄シヨウかきに似ている 僅一重春月透出

琴如雪響爬沙

石埭七十六老人

石埭七十六老人

# ○中村敬宇 なかむら けいう 江戸

【別称】正直まさなお、訓太郎、敬太郎、敬輔

【享年没年】58歳1832天保3〜1891明治24

【生地】【住地】江戸

【系譜】幕府同心の家生まれる。

【略歴】明治時代の日本の啓蒙思想家、教育者。文学博士。英学塾・同人社の創立者で、東京女子師範学校理事、東京大学文学部教授、女子高等師範学校校長を歴任した。

昌平坂学問所で学び、佐藤一斎に儒学を、桂川甫周に蘭学を、箕作奎吾に英語を習った。後に教授、さらには幕府の儒官となる。幕府のイギリス留学生監督として渡英。帰国後は静岡学問所の教授となる。

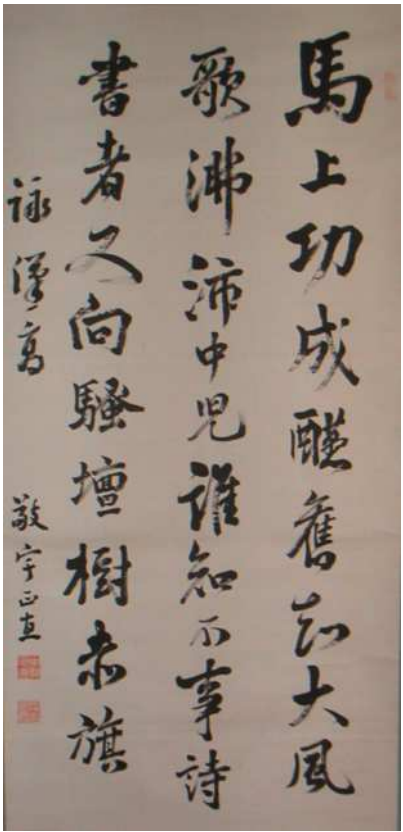
教授時代の1870明治3に、サミュエル・スマイルズの『Self Help』を『西国立志篇』の邦題（別記名『自助論』）で出版、百万部以上を売り上げ、福澤諭吉の『学問のすすめ』と並ぶ大ベストセラーとなった。序文にある、Heaven helps those who help themselves. を「天は自ら助くる者を助く」と訳したのも彼である。

ジョン・スチュアート・ミルの『On Liberty』を訳した『自由之理』（現在では同書を『自由論』と称するのが一般的）は、「最大多数の最大幸福」という功利主義思想を主張し、個人の人格の尊厳や個性と自由の重要性を強調した。

1872明治5、大蔵省に出仕。女子教育・盲啞教育にも尽力。1873明治6、同人社を開設。また、福澤諭吉、森有礼、西岡、加藤弘之らとともに設立した明六社の主要メンバーとして啓蒙思想の普及に努めた。機関誌「明六雑誌」の執筆者でもあった。

1890明治23、貴族院勅選議員に任じられ、死去するまで在任した。六大教育家のうちの3名のクリスチャン（あと2人は森有礼と新島襄）のうちの一人。興亜会会員。

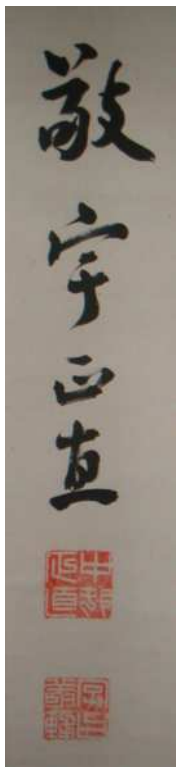
世三、書（七絶）



馬上功成醜オン舊ふるい知大風  
歌沸沛イ中兒誰知不事詩  
書者又向騷壇樹赤旗



詠謹高



敬宇正直



文學博士 中村敬宇正直先生書

# ○貫名菘翁海屋

ぬきをすうおう かいおく 阿波

【別称】吉井苞、君茂・子善、海客、海叟、菘翁、方竹山人、須静山人

【享年没年】86歳—1780安政7—1863文久3

【生地】阿波国【住地】

【系譜】

【略歴】晩年には下鴨神社に奉仕し、諸国を遊歴した。

【書画暦】書は西宣行に師事して宋法を学ぶ。近世第一の能書家と称され、須静塾を開く。

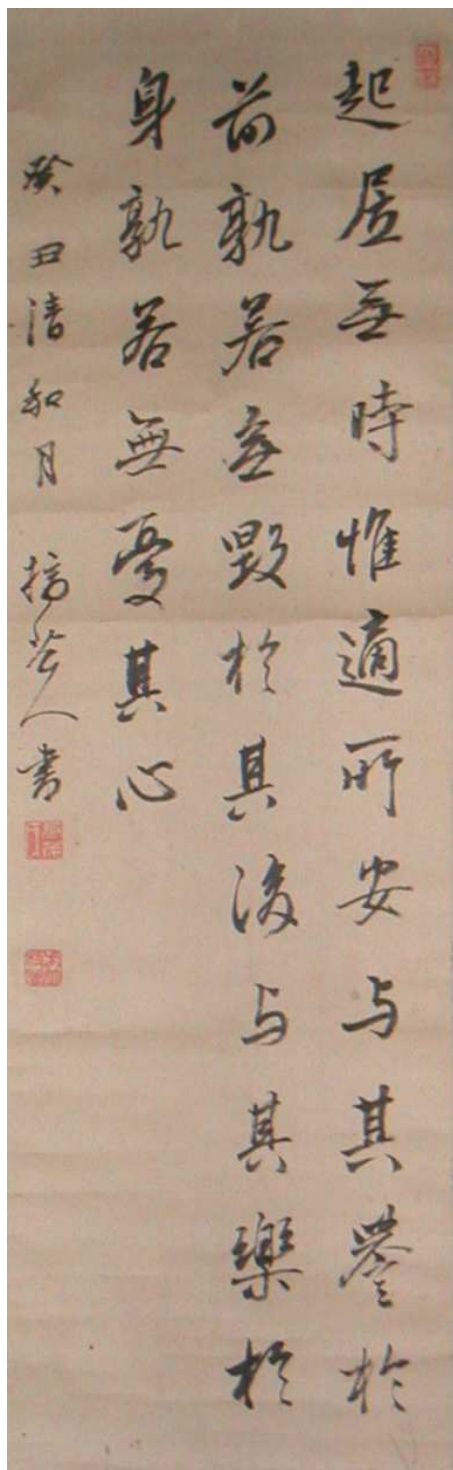
中森 万象氏談 「菘翁自詠詩稿帳 江川吟舟」より

71歳(一〇四) 嘉永元年)の頃、数年住んだ三本木(三本町)から栗田に程近い錦織村岡崎聖護院(左京区)に転居したが、そこは菘とうなの名産地だったので、居室の周囲に植えていたので、「摘菘翁」と号し、のち摘を略して「菘翁」というようになった。その頃から、書は本格的になり、あまねく古碑帳を涉獵し、習わざるはなしの勉強ぶりで追隨を許さない境地に達したという。従つて、癸丑は嘉永六年 77歳の時だと考えられるという。



# 世四、書古人語

(字を解説してくれた同級生書家中森万象君に感謝を込めて贈呈)



起居無時惟おも適所安与其(有...脱字)譽於

前孰若無毀於其後与其(有...脱字)樂於

身孰若無憂(於...脱字)其心

癸丑(嘉永六年)清和(四)月



拾菘人書



貫名菘翁書

貫名海屋 めきなかいおく

生没年 安永七年一文久三年(一七七八一—一八六三)

八十六歳

職種 儒者 書家 南画家

貫名流の祖

出自 阿波徳島藩主蜂須賀侯の弓術師範貫名某の子

本姓吉井氏 阿波国の人

称号 名直知(一に直友)・苞 字子善・君茂 通称

政三郎・省吾・泰次郎 号海仙・海叟・松翁

・摘松翁・松叟・海客・須静堂・三緘堂・方

竹主人・海屋・林屋・海玉

師事 日高鉄翁〔画〕 中井竹山〔儒学〕

門下 浅井柳塘・日根対山・池田陶所・村田香谷・

吉田公均〔画〕 久志本海荘〔書〕

事蹟 文筆を志し、京都に出て須静塾を開き儒学を

講ず。書にすぐれ、中国やわが国の古法帖を

研究して一流を立て、幕末の三筆の一人。画

は初め妻の父に狩野派を学び、のち南画を修

めて一画風をつくり、山水画を得意として京

都第一流の詩書画三絶の人と称された。代表

作「永源晩霜図」。

備考 京都に長く住み、晩年は下鴨に隠居。

貫名苞拜識

海屋

海屋

海屋

海屋

海屋

海屋

○貫名海堂 ぬきなかいどう 播磨

【別称】肅、子儀、海堂・海叟

【享年没年】歳一〇五 明治一八〇一 昭和一六一九四一

【生地】〔住地〕兵庫播磨垂水

【書画暦】書家。松翁の筆勢と非常によく似ているため、松翁の一族か門弟であるとされる。

卅五、二行詩（七絶）

四顧山光接水天  
凭欄十里芟前香  
清風明月無人管  
併作南樓一夜涼



庚戌之小春書  
海堂書

四顧山光接水天  
凭もたれる欄十里芟前香  
清風明月無人管  
併作南樓一夜涼

庚戌（二〇〇）明治四三年）之小春書

海堂肅（陰刻）貫名肅印（陽刻）海堂居士

海堂書



# ○梁川星巖

やながわ せいがん 美濃

【別称】孟緯もうい、新十郎

【享年没年】69歳1789寛政元〜1858安政5

【生地】美濃（岐阜）【住地】

【系譜】

【略歴】15才に江戸に出て古賀精里せり、山本北山に学んだ。女流詩人であった妻紅蘭こうらんとともに20年間も各地を旅したり、江戸で玉池吟社たまぎほくちぎんしゃを開いたりした後、京都に任んだ。たまたま寛永6年へリーの閑港要求により、幕府は翌年下田で仮条約を結んだ。かくて尊王攘夷の論が起こり、星巖も諸藩の志士と画策するところが多かった。幕府は勤王の志士を捕らえ、吉田松陰、橋本左内等皆を投獄した。星巖は、志士の頭領と目せられ捕らえられる所、安政5年9月2日病氣のため70才で急死した。越えて4日、捕吏はりはり：罪人を捕らえる役人が家に到ったが既に没した後で難を免れた。当時「星巖は詩に上手より死に上手なり」と言ったという。

卅六、絹本七絶

霜  
繡ぬいどり衾ふすま香暖合歡床玉偏聲沈夜正長  
月予樓高啼不定人間何處五更

星巖真逸

霜  
繡ぬいどり衾ふすま香暖合歡床玉偏聲沈夜正長  
月予樓高啼不定人間何處五更

星巖真逸

星巖真逸

梁川星巖絹本七絶  
豎幅

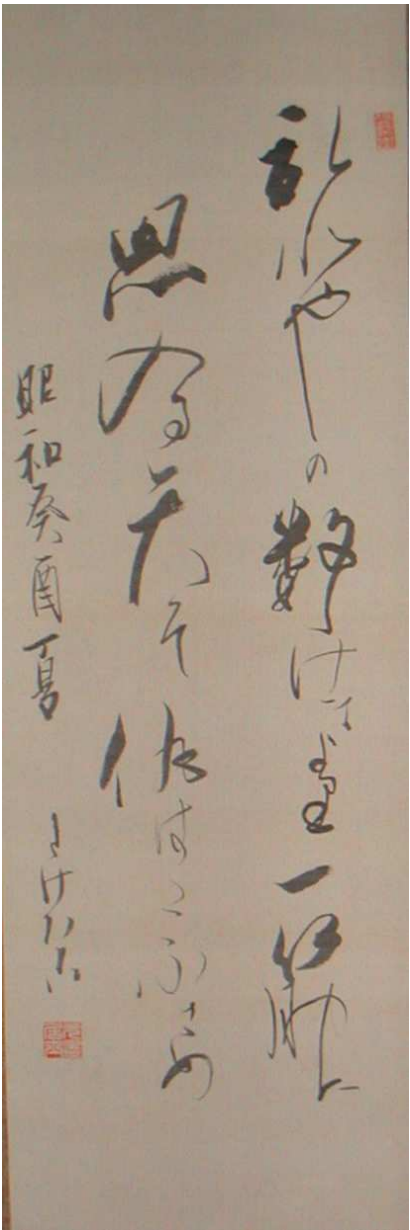
梁川星巖 絹本七絶 豎幅

# 三、作者不詳

○武彦 たいけいこ

松本偉彦の父、松本武彦【略歴】外宮権禰宜、和歌【享生没年】54歳一〇二〇 文政元一〇二一 明治4だとすると、作年の昭和癸酉（昭和八年）と時期が合わない

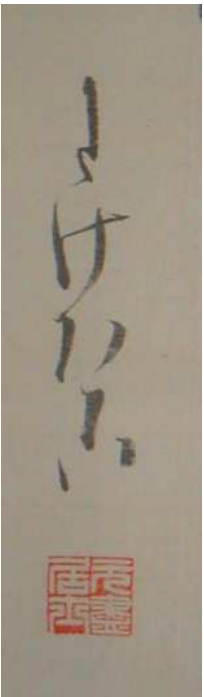
廿七、和歌



乱れやの敷けてより 一筋に

思入る天ぞ 仇はこふさめ

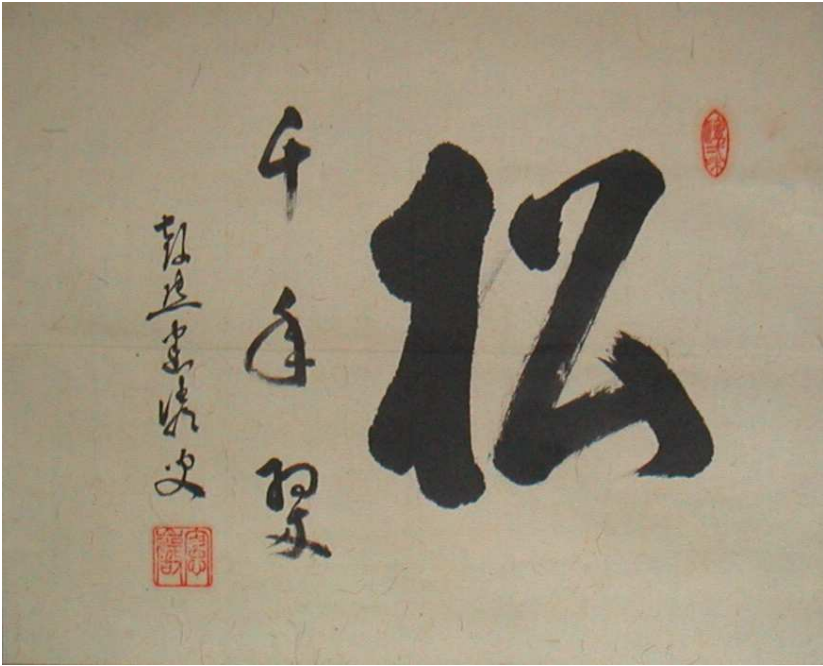
脱羈而中正 昭和癸酉（一〇三三 昭和八年）夏 武彦書 たいけいこ（印）无盡（无尽）居士





○憲巖 のりいわ?

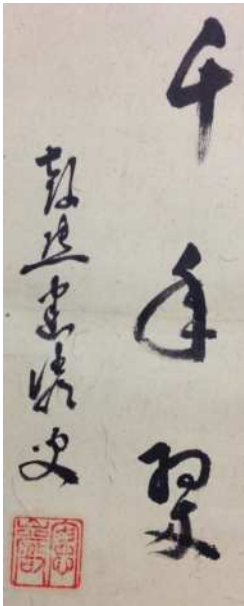
廿八、松



擅弋味

松

千年翠



教然憲巖



憲巖

## 書の部 編集後記

中国武漢から発した新型コロナウイルスが世界中に蔓延（パンデミックというらしい）し、感染対策の一環として、外出の自粛を要請されたことにより時間ができたこと、そのお蔭で心が落ち着いたこともあり、一年間放置した「書の部」の編集が完了することができた。

2020 令和2年4月 秋田耕司

### （付録） 漢詩解説

漢詩は、「4句」からなる「絶句」と「8句」からなる「律詩」がある。

絶句4句は、起・承・転・結からなる。

1句が5字の五言絶句と7字の七言絶句とがある。六言絶句の数は多くない。

「平仄」の規則を厳密に適応する「律絶」と、制約が比較的緩い五言詩のみの「古絶」に分類される。

律詩8句は、2句1組で聯レンを構成していて、起聯キレン（第1・2句 首聯）・領聯ガンレン（第3・4句 前聯）・頸聯ケイレ  
ン（第5・6句 後聯、領聯と頸聯とは対句になる。）・尾聯ビレン（第7・8句 落句）からなる。

五言律と七言律とがあり、たまに六言律詩もある。

格律（句数・字数・平仄・押韻・対句といった格式や韻律のこと）の制約を厳しく受けるのでこの名がある。格律から律詩の前半四

句に相当するものは「律絶」と呼ばれ、「小律詩」ともいう。

いざれも、「平仄」ヒヨウソクに従い、作詩される。

「平仄」とは？

中国語における漢字音を「四声」にしたがって、「平声」ヒヨウシヨウと「仄声」(平声以外の三声)：上声ジヨウシヨウ・去声キヨシヨウ・入声ニッシヨウ)の2種類に分けたもので、絶句・律詩ともに各字、各句、各聯同士で重視される「押韻」(脚韻 漢詩では一定の句末に同一の韻字を用いること。)等の作詩規則のこと。

平声に属する文字を「平字」、仄声に属する文字を「仄字」という。

第1句第2字が「平字」ヒヨウジであるものを「平起」、「仄字」ソクジであるものを「仄起」という。

1. 五言では二四不同(各句第2・4字は平仄を異なえる)、七言ではさらに第1句に、二六対(第2・6字の平仄を同じにする)で押韻する。第1句は押韻してもしなくても良い。第1句に押韻しないのを「踏落し」という。換韻はなされない。

押韻は、平韻(平字ヒヨウジで押韻)が多く、まれに仄韻(仄字ソクジで押韻)がある。

2. 各句第2字を横に見てゆき平仄仄平(または仄平平仄)とすること、「孤平」、「下二連」を避けることなどの「粘法」を守る。普通の平仄式・粘法に合わないのを「拗体」という。

3. 孤平(仄字の間に平字が1字はさまること)、下三連(下3字に平のみ、あるいは仄のみ連なること)は避ける。

4. 同一字を用いない。ただし、例外とされるものが多い。

「四声」とは、漢字を頭子音を除いた部分の音の高低と長短により4種に区別したものの、

1. 平声：低く、平らで抑揚のない発音……

2. 上声：尻上がりが高く発音するもの

3. 去声：発音の最初が強く、最後が低く弱まるもの

4. 入声：発音が短く急である。

平字を○で、仄字を●で、合わせて押韻を示せば、  
 五言絶句仄起式 五言絶句平起式 七言絶句平起式

七言絶句仄起式

結	轉	承	起
○ ○ ● ○ ○	● ● ○ ○ ○ ●	● ● ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ● ○
韻		韻	
● ● ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ●	○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○
韻		韻	
○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
韻		韻	韻
○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
韻		韻	韻

五言律仄起式

五言律平起式

七言律仄起式

七言律平起式

尾聯		頸聯		領聯		起聯	
● ● ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ● ○ ○ ○	● ● ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	● ● ○ ○ ○ ○
韻		韻		韻		韻	
○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○
韻		韻		韻		韻	
○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○
韻		韻		韻		韻	韻
○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○
韻		韻		韻		韻	韻

(以上)

2020年4月30日春